

世界でただ1人のLv.9

しぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界中で一番強い、と言われている青年はしかし、表舞台に出る事を好まず次第に人々から忘れ去られていった。

極少数の人だけに知られている青年が、再び表舞台に現れる時、舞台は少しずつズレながら動いていく――。

注：主人公自分勝手成分強めです。なるべく原作通りのキャラにしようとはしていませんがところどころ違う事をご了承ください。

目次

| | |
|-----|-----|
| 十二話 | 106 |
| 十一話 | 98 |
| 十話 | 88 |
| 九話 | 81 |
| 八話 | 73 |
| 七話 | 67 |
| 六話 | 58 |
| 五話 | 49 |
| 四話 | 38 |
| 三話 | 25 |
| 二話 | 15 |
| 始まり | 1 |

| | |
|-------------|-----|
| 十三話 | 113 |
| 十四話 | 121 |
| 幕間 無能の少年のお話 | 127 |

始まり

千年前。

まだ神々が降りて来ていなかった頃。

彼がまだ幼い少年だった頃。

『逃げれるか!?!』

『駄目! 道が無い!』

周囲には夥しい数のモンスター。無数の人とモンスタアの死骸が混じった、地獄。

まだ幼い少年をモンスタアの猛攻から必死に守る父と母。

『くそっ!』

父が、モンスタアを屠りながら悪態をつく。

手が回らない。モンスタアの数が多すぎる。どうしても、道が切り拓けない。

『覚悟を……決めましょう』

母もモンスタアを屠りながら父にそう告げる。

『……ああ、そうだな』

一刀一殺。

父と母共にその剣技は神業の域。

全方位から迫り来るモンスターから少年を守れているのはひとえにその剣技故。完璧な連携と神業の剣技で辛うじてそのギリギリのラインを保っている。

『さて……死のうか』

なんでもないように父が言う。

諦めた？ 否、その眼は死んでない。

『ハル君、ごめんね。お母さん達はここまでだから』

――

上手く声が出ない。

死ぬ？ 何で？ あんなに強かった父と母が？

理由は単純だ。

――ただ、弱い。

足手纏いにしかならない弱さ。

小さくても充分に戦えないといけないうこの時代。しかし少年は弱すぎた。

『愛してるわ、ハル君』

母が微笑み、父が笑う。

不思議と、モンスターが止まっていた。怯えていた。

父が、剣を振るう。

一刀。たつた一刀で、無数のモンスターが半分以下まで減っていた。母が剣を振るう。

轟音が天地を揺るがす。モンスターの数は、数える程まで減っていた。

『お別れだ、ハル。生きろよ』

父はこちらを振り返らなかつた。

「——まつ」

ようやく出た声。だが、遅すぎた。

もう、モンスターはいない。

そして、父と母もいない。

その直後だ。神がやって来たのは。

放心する少年の元に、一柱の女神がやってきてこういった。

『私の、ファミリアに入りませんか？』

ルーナと名乗るその女神は言った。

父と母を亡くした少年は少し逡巡した後、その手をとった。

——それから、もう千年が経った。



「ねえ、本当にいいのですか？」

「いいよ、構わない」

「だって、これを公表すれば貴方はこの都市全域に知られて」

「いいんだ。いくら強くなったって、俺はこの時代の間人間じゃない」

「でも、L v. 9なんて。かの武人でさえL v. 7なのに」

「俺は今の生活に満足してるよ。確かに俺を知ってる人は少ない。だけど、それでいいじゃないか」

俺の言葉に、ルーナは渋々納得してくれたようだ。

ただルーナは息子を自慢したいだけ。

『私の息子はこんなに凄いいんだぞ』とオラリオ中に言いたいだけだ。

「はあ……じゃ、行ってくる」

「ここのところそうだ。事あるごとに公表はしないのかなどと聞いてくる。

「あ、待って。ハル君」

「はいこれ、と包みを渡される。

「ロキから頼まれてて」

なるほどおつかいか。ちゃっかりしてやがる。

「了解」

短く答えてホームから出る。

それにしてもルーナには困ったものだ。神のくせにかなり子供っぽい。よく泣くし。しかし、他ならぬルーナの頼みだ。仕方ないからロキのホームに乗り込むとしよう。

「ロキ・ファミリア」はいつも新人が交代制で門番らしき事をやっていた。

それは今も続いているようだが。さて、今の「ロキ・ファミリア」の実力はどうなのかな？

仮面にローブ。変装した俺は怪しい事間違いなしだ。

「生まれ！」

無視。

「ワープ」

無詠唱で魔法を使う。

視界がブレ、次の瞬間には……ほら、もう本拠地だ。

「て、敵襲だああああ!？」

「団長に報告を！」

「各員武器を!!」

ふむ、緊急時の対応もそこまで悪くない。だが。

「ちよつと動き出しが遅いかなあ」

手刀で全員を気絶させると、俺は悠然と歩を進める。さて、次は誰かな？

「うっわー、どうなってるのこれー」

「侵入者？ ロキ・ファミアリアに？」

騒ぎを聞きつけたのか、アマゾネスの2人がやってきた。

警戒は怠っていないようだが——しかし、胴がガラ空きだ！

距離を一步で詰めた俺は、胸の無い方に掌底を繰り出す。狙うは鳩尾。

「かはっ!？」

「テイオナ!？」

崩れ落ちるが、まだ俺を睨みつける気概があるとは。しばらく都市外にいたから名前
はわからないが、多分Lv. 5。

「このっ！」

即座に攻撃してくるのはさすが第一級といったところか。沈めてもいいが、しかし邪
魔が入ったな。

「ストツプだ。落ち着けティオネ」

槍を俺とティオネと呼ばれたアマゾネスの間に突き出し、俺を止めるといふよりアマゾネスを止めたか。

「でも、団長！ この侵入者が」

【勇者】^{ブレイバ}フィン・ディムナ。彼が出てきたということは俺の遊びも終わりか。

「さて、久し振りに帰ってきたかと思えば随分な挨拶じゃないか。ねえ、ハル」

「仕方ない、フィンの顔に免じてここらでお遊びはやめてあげよう。ロキはいるかな、取り敢えずルーナからのおつかいを済ませたい」

「……まあ、君はいつもそうか。こっちだ」

「あの団長——」

「すまない、彼は知り合いだよ。後で紹介するから幹部達を集めておいてくれ。頼めるかな、ティオネ」

「まっ、任せてください！」

おっ、あれは速い。

「なんだ、随分惚れられてるんだな」

「ああ、全く疲れるよ」

「俺にはそうは見えないけどな」

会ったばかりのフィンからは想像できない。随分と楽しそうだ。

「おー、戻ってきたんか、自分」

仮面にローブなんていう怪しさ満点の格好をやめた俺はロキのいる部屋に通されていた。

「ああ、ルーナからおつかいを頼まれてね。はい、これ」

俺が取り出したのはポーションである。

月の加護が付与されたポーションは通常の物より効果が格段にあがる。

月の女神であるルーナが下界で行えるただ一つの奇跡。

「おー、ありがとなあ。遠征の為にこいつは欠かせないんよ」

「遠征か」

「……なんやその顔」

「砲竜の所為でおめおめ帰ってきたって何処かで小耳に挟んだんだけどどう言う事？」

「うるさいわ。ソロで深層に行ける自分がおかしいねん」

ロキをからかうのもその辺にして。

「アイズ、久しぶり……り？」

「お久しぶり……です。ハルさん。どうか、しましたか？」

「いや、大きくなつたな。あの時とは大違いだ」

「ハルさんには追いつけなかった……」

「はははつ、こんな数年で追いつかれたらたまつたもんじゃねえよ」

ぐしゃぐしゃとアイズの頭を撫でてやる。

「なににー？ アイズ、この人と知り合い？」

「おつ、さっきのアマゾネスじゃないか。殴つてすまん」

「もう痛くないから大丈夫！ それにしてもお兄さんすつごく強いんだねー！ 名前は

なんていうの？」

「ハルっていうんだ。よろしくな」

「あたしはティオナ。よろしくねー！」

ふむ、胸の無い方がティオナか。覚えた。

「あつ、今変な事考えたでしょー！」

「いやね、見事に無いな……つて」

「なにおう?!」

むきーつと殴りかかってくるティオナを軽く受け止める。Lv. 5であろうと俺からすれば兇戯とさして変わらん。

「で、こいつは何なんだ？」「ロキ・ファミリア」じゃねえんだろ？」

ウエアワルフ
狼人の青年の問いに答えようとしたところで。

「ベートの問いには僕から答えよう。ちようどみんな集まったようだしね」

「……へえ、結構増えたんだな」

「ああ、自慢のメンバーだ」

「まだまだひよっこじゃがのう」

「久しぶりだなガレス。くたばってなかったのか」

「こやつらがひよっこじゃ無くなるまで死ねんわい」

さて、他に挨拶してない人は——もういないよね、うん。

「何故私を無視する？　なあハル。私に何も言わず何年も何処かに言っていたのか説明する責任があると思うんだが？」

「やだなありヴェリア。俺がそんな無責任な人に見えるか？」

「ああ、見える」

「ぐさっ」

まあ確かに何も言わずに出て行ったのは確かだけどそれは止むに止まれずな事情があつてだな。

「……私がどれだけ心配したと思っている」

「あら、てつきり怒っているものだ」と

「確かに怒っていた。が、無事なハルの顔を見れたからそこは不問にしておいてやると言っているんだ」

「ここまで素直なリヴェリアは久しぶり、なんだけど。」

「他の連中がいるつちゆうのに……」

「え、どういうことー!？」

「なっ、ババア……」

「みんないるぞ？ わかってていつてる？ おーい」

「……………」

あら、シヨートしてら。

「リヴェリアとハルって結婚してるんだよね」

「うむ、そういうこと」

代表してフィンが答えてくれた。

「聞いてねえぞ!？」

「リヴェリアとハルさんが……私も、知らなかった」

「あれ、言っただけ」

「聞いてませんっ」

パンツ、とぎざざわししてる幹部達を嗜めるように柏手を一つ鳴らした。

「リヴェリアと結婚している事も十分驚いただろうが。改めて紹介する、彼の名はハル。
【ルーナ・ファミリア】のたった一人の団員だ」

「聞いた事ねえファミリアだな」

「そもそも主神のルーナが殆ど表に出てこないし、団員であるハルが都市外に出てたのもある。けど、彼は特殊だね」

「特殊って？」

テイオナが首を傾げ、フィンに質問したところで、今日最大級の爆弾を投下する。

「彼のLvは9だ」

『……………は？』

一同が口を開けて固まる。

「私……………それも聞いてません」

「そりやそうだ。あの時お前に言ったらそれこそ今ここにいなかったらうな」

「……………彼は特殊だと言ったね。その続きだ。彼は何歳に見えるかい？」

「フィン達と同じくらい？」

「団長達よりは下じゃない？」

「ババアより上か？」

「ガレスさん……くらい?」

「うん、ベートが一番近いね。正確にはハルはまだバベルが出来てない頃——つまり、一千年前から生きてるって訳だ」

「そんなの……」

あり得ない。シーンとなった室内から、そんな空気が漂ってくる。

まあ無理もない。百年生きれば上等なヒューマンが千年も生きてるんだから。

「ホンマやで。ウチが保証したる」

「ロキ」

「ウチら神が地上に降り立ってから千年も経つとる。そんだけ時間が経つとるからコイツの事を知らん神はおらん。そういう訳や、ウチにはコイツが千年生きてる理由はわからんけどな」

「ロキ無乳よく言った!!」

「余計な事言うなやぶつ殺すぞホンマ!?!」

「と、言うわけで千年生きてるLv. 9のハルだ。改めてよろしく。この調子だとまだまだ死ななそうだから、リヴェリアを一人残す事が無いのだからね。寿命が長すぎるヒューマンも捨てたもんじゃない」

「みんなの前で何を……っ!」

さて、と一段落ついたところで、フィンがこう締めくくった。

「一週間後に迎えた59階層への遠征。それにハルにもついてきてもらおうと思っ
てる」

え、何それ初耳。

二話

「あれ、言つてなかつたかな？」

「おう今聞いたつまり初耳だ」

大人数の『遠征』で余所者の俺が着いて行くつて、やつかみを受ける気しかないんだが。

「報酬は弾むよ？」

「金は生憎とたくさんあるんでな。そんな事より何故俺を誘う」

それは、非公式とはいえ都市最強の一角を名乗るファミリアが俺というイレギュラーを迎えて楽に攻略しようという風に取りれなくもない。

俺の事を知っている人は少ないが神々は知っているし、俺が着いていけばその事は嫌でも伝わる。そのリスクをフィンが承知してないわけがない。

「親指が疼くんだよね。僕たちだけで行つたらそれこそ取り返しのつかないような事態になる気がする」

「へえ」

「ああ、もちろんそんな事態にならないのが一番なんだけど。ただどうしても嫌な予感

が拭えない」

「はあ……わかった。着いて行ってやろう。ただし」

「わかっている。その時まで君の力を借りるつもりはない。これは【ロキ・ファミリア】の遠征だからね。ああ、ちなみにロキの許可も取ってあるからその辺も大丈夫」

被せ気味にフィンがそう言ってきた。

まあ、わかっているならよしとしよう。

なんせ59階層程度俺が前に出れば簡単になっちゃおう。

ロキが知っているなら話は早い、か。

「そういうことだ。ああ———そういえば」

やってない事があった。と、俺は手を叩く。

「アイズ、久し振りに模擬戦でもしようか。俺の実力に納得してないのがあるみたいだし」

な？ という視線を向けて見ると、その場にいる全員の視線が集中した。

「全部データラメって事があるかもしれないねえじやねえか！」

ベートと呼ばれた狼^{ウエアウルフ}人が言うにはそう言う事らしい。

若干リヴェリアが小言を言いだしそうだったので、視線で制しておいた。

「さて、やろうか。何処まで強くなったのか見てあげよう」

「よろしく……お願いします」

あの頃とははるかに違う瞳が、しかし、同じ好戦的な光を携えて俺を見ていた。

所は変わってダンジョンの深層。

「もうあの中庭じゃ全力を出せなさそうだ。他の冒険者もいないだろうし、この辺が丁度いいだろう」

「それじゃあ早速だけど二人とも準備はいいかい？」

リヴェリアの結界の中で、フィンが俺とアイズに呼びかける。

「ああ、良好だ」

「大丈夫……です」

その返事に頷くフィン。

「うん。リヴェリア、結界の維持頼んだよ」

「任された」

「さあ——闘おう。」

「始めッ!!」

「——ッ！」

まさに神速の一撃。

初速から最速までのラグが殆どないこの全身全霊の突き。

これを真正面から止められる相手など、この世界に数えるほどしかないんじゃないだろうか。

しかもまだアイズは風を纏っていないから驚きだ。

「強くなったんだな、アイズ」

「——ッ！」

ガキンッ！ と金属と金属がぶつかったような音が響く。

まあ、この場合は金属ではなく、

「……また」

「ひひっ」

俺の歯、なんだけどな。

ぺっ、とアイズの剣を戻してあげる。

いつの間にか、モンスターが消えていた。いかに深層であろうとこんな戦闘に巻き込まれれば死ぬだけだ。そこら辺は本能でわかっているんだろう。

というかこの戦闘を邪魔したら俺が消す。

「さて、そろそろ風を纏った方がいいんじゃないか？　あまり悠長に構えてつと——死ぬぞ」

少し殺気を込めて言つてやる。

するとアイズは弾かれたように後ろに下がりながら叫んだ。

「テンベスト目覚めよ!! ——ッ!?」

丁度風を纏い終わった頃に突き刺さるかのように俺の蹴りがアイズの脇腹にめり込む。いくらかを風に軽減され、それでもアイズの身体は真つ直ぐダンジョンの壁目掛けて飛んで行った。

「……………ん？　おっと」

壁にいたはずのアイズの姿は既になく、風を纏ったアイズは先程よりも格段に速い速度で的確に俺の目を狙ってきた。

危ないな、失明しちゃうだろ？

「——ッ！」

更に連続攻撃。

人体の急所と呼べるところばかりを狙ってくる実に趣味のいい攻撃だ。

単純な突きだけではない、過去に教えられ、新たに自分で覚え、それを昇華してきたであろう多彩な剣舞。

たった数年でここまでとは、嫉妬しちゃうね。

だからこそ、その才能を、その努力を潰さなくちゃならない。この程度で満足するとは思えないが、一応な？

「やり直し——だっ！」

連続攻撃の一瞬の間について蹴りを叩き込む。が、俺が手を抜き過ぎたのか、アイズの反応速度が素晴らしいのか、間一髪ガードが間に合ったようだ。

それでも吹き飛ばす事には変わりはない。

「ああッ!？」

「あまりやり過ぎるなよ」

「わかってらあ」

リヴェリアから注意の音が飛ぶ。俺としたことが予想よりもアイズが強くてハメを外していたらしい。飛ばしすぎか？

「さて、そろそろフィナーレか？」

気がつけばあたりは暴風と化していた。

それもアイズが起こす風。

「リル・ラフアール」

暴風が、1つになって突っ込んでくる。

そう、暴風だ。だけどな、その程度の風は俺にとっちゃそよ風と変わんねえ!

「いやあ……強くなつたな、アイズ」

がっちりとその刃を手で掴み、軽々とアイズの技を受け止める。

そして。

「参り、ました」

ピタリとアイズの首に添えられた手刀を見て、潔く負けを認めた。

しかし20にもなつてない少女がこれだけの強さか。

「才能って怖い」

「そう言うハルは?」

「俺は下の下だ。ヒューマンでもエルフでも寿命がある。特にヒューマンは長くて100年程度だ。例えばアイズが千年生きてたら俺の数倍は強いさ」

「千年強さを求め続けられるつても才能だと思っけど?」

「千年、千年自分を鍛えても俺の両親の足元も見えてこない。あと何年経てば見えるのやら」

「君の両親は何千年も前から生きていてハルの何倍も鍛えてたつて事は?」

「お前天才か……!?!」

俺もずっと若いままだしそういう事があつても不思議じゃない。

さすが「ロキ・ファミリア」の団長だ。

「ハルって時々馬鹿だよな」

「あ、お前俺を馬鹿にしたな消し炭にしてやってもいいんだぞ？」

「ンー、やられないのはわかってるけど、笑えない冗談だね」

「ダンジョンでそんな事してる暇あったら地上に行きたい。と言うわけで帰るぞ」

全員を集めるのはフィンに丸投げして、俺はみんなを連れて帰るだけの簡単なお仕事だ。

「さ、ハル。準備はできたよ」

「了解。「ワープ」」

人数が多いから魔力が吸われるがまあなんとかなる範囲だ。

一瞬視界がブレればもうそこは「ロキ・ファミリア」のホームだ。

「いやー、詠唱も無しにこの効果。やっぱり反則じゃない？」

「はっはっは。羨ましかろう」

魔法は親の形見だからな。強くなきゃ俺が納得できない。

とはいえ、習得するのは苦労したのだが。

「さて、遠征は一週間後だ。遅刻しないでね？」

「ああ、善処するよ」

さて、俺も帰るとするか。

ルーナが心配してるし。

「ワーぐえっ」

首がきゅって、きゅって。

「今夜、いつもの場所で、待ってるからな」

「……ああ」

アイズの成長にびっくりしててリヴェリアの事をすっかり忘れてたって事は墓場まで持っていこう。

「……………はあ、覗き見されるのは好きじゃないんだが」

いつもの場所で待ってるはずのリヴェリアの所へ歩きながら向かう途中、久し振りにこの視線を感じた。値踏みされてるような、非常に上からの視線だ。正直言って気分が悪いぞ？　なあ、フレイヤ。

「……………【ワープ】」

1日にそう何度も使う魔法じゃないんだが、まあいい。【フレイヤ・ファミア】に少しばかり灸を据えてやらんとな。

何が寵愛だ。俺の嫁さんの方が100倍可愛いつて事を教えてやらあ。

三話

「神だかなんだか知らないが、少し勝手が過ぎるぞフレイヤ」

「あら、ごめんなさいね？　怒らせてしまったのなら謝るわ」

そうのためうフレイヤの顔に浮かぶのは笑み。反省の色なんて見えないし、見せようなんて思ってもいけないだろう。

それは危害を加えられないとわかっているからこそその余裕。その余裕が、癩に触る。

「……いつも思うが、その格好はなんだ？　神ならもつときちんとした格好をだな。具體的にはリヴェリアみたいな感じの」

「嫌よ可愛くない」

「よろしいならば戦争だ」

「嘘よ。とつてもいいと思うわ。でも、それは彼女が着てからこそじゃない？」

「うんうん、まあ確かにそうだ。お前如きが着たところでリヴェリアの可愛さの100分の1も引き出せるとは思わないし。何よりそのふぎけた性格がもう全てを台無しにしてるし欲しい子は他のファミリアの子でも奪うとかそんな事考えてる辺り本当に歪んでるっていうか、リヴェリアの足元にも及ばないっていうか。神連中もそうだが何故

こんな奴がいいのかようわからんな。なあ、オツタル？」

「……………」

「だんまりかあ？ 我が主神を侮辱されて手の一つも出ないってか？ ほら、手を出し

てこいよ、な？」

「オツタル。絶対に手を出しちや駄目よ」

おっと、神には危害を加えられないがその眷属ならやり返してついうっかり…………つて出来るのはわかりきってた事か。

オツタルがこちらに剣を向けようとした時点で首が飛ぶところまで見えているのだから。余裕そんな笑顔が少しくずれている。

「…………うん、その顔で満足してやろう。その視線は好きじゃない。俺に向けるのはよし
てくれや」

「…………善処するわ」

こう念を押したところで感じる時は感じるから半分諦めてはいるがこうやって忠告に
いれないと調子に乗る。

「はあ…………リヴェリアに怒られる」

もう一度「ワープ」を使って、きちんと元の場所まで戻り歩く事数分。

夫婦共同で買ったオラリオの一角に建つ一軒家だ。かなり大きいですがに2人で

使うには広すぎるし、リヴェリアはいつもはホームで寝泊まりしてるし、俺はそもそもオラリオにいない事がある。

だからいつもは住み込みのメイドを雇って家の掃除を任せているが、家の中にある気配はリヴェリア一人。

……恥ずかしがって全員宿に泊まらせたな？ 可愛い奴め。

「遅い」

意気揚々と扉を開けたらいつかの頃と同じような目をしたリヴェリアが立っていた。

そう、あれはこの家を買う時にふざけて「城みたいな家に変えようぜ！」と言った時と同じ絶対零度の目だ。

「いやー、ほら、ね？ フレイヤの視線が」

「無視すればいいだろう？ 私とフレイヤ、どっちが大事だ」

「そりゃリヴェリアに決まってるけど」

「けど？ けどなんだ」

「少し到着するのが遅れてその理由が別の女だったからって嫉妬してるリヴェリア可愛

い」

「なっ、」

「凶星？」

「そ、そんな訳ないだろうっ」

「はいはい。可愛い可愛い」

「……………」

頭を撫でてやればいつもの固い表情が少しずつ崩れていくのがわかる。

リヴェリアが小さい頃は撫でようとすると、とうか触れようとすると逃げられたが。

はて、リヴェリアが触れさせてくれたのはいつだったか。

『私の胸の高鳴りがわかる……………?』

「…………ツ!!」

「おっと待てこんな街中で魔法はいけない。しかもそんなに魔力を注ぎ込んだら俺は傷一つつかないけど街が大変な事になるぞ? うん、しかし初めてリヴェリアに触ったのが胸だとは俺も思ってたなかってけど」

「…………ツツツ!!」

「待て待て、詠唱を始めるのはやめろ。シャレにならんぞ。さすがに人生経験豊富だと自負していた俺も潔癖と言われたエルフがそんな事をしてくると思ってたからてつきり握手かなと思つて差し出した手がまさか胸に」

「……………」

「レア・ラーむぐっ」

「そんな事したらオラリオにいれなくなるぞー？ 全世界から狙われても守ってやれる自信はあるけど、それはリヴェリアの望むところじゃないだろう？」

「……初恋、だったんだ」

「あの時の俺の戸惑いを見たリヴェリアの焦りっぷりときたら【ロキ・ファミリア】の団員達に見せれば愛されキャラになるんじゃないか」

「私の話はもういいだろう！ ハルの話だ、今まで何をしていた！」

「ありや？ もう終わり？ まだいっぱいあるんだけどな」

「もういい」

「あ、はい」

どうやらふざけるのはここまでのようだ。リヴェリアも小さい頃はただのクソ頭の固いエルフだったし。小さい頃に言った言葉をもう一度言ったらどうなるか気になるどころだけそんな雰囲気じゃなくなったようだ。

「で、だ。俺が何したかって言われるとリヴェリアには教えたいんだがこればかりは言えないんだ」

「何故だ」

「おっと、有無を言わさぬ視線を向けるリヴェリアも可愛い——わかったわかった。理由は話す。俺の親を知るってヤツに声を掛けられてな、面白いと思ってついて行ったん

だ。何処に行つてどんな事をしたのかつて言うのは話すなという約束だから話せないが」

「それで、親の事はわかつたのか？」

「まあ、それなりに」

「……そうか。次からは私に一言でもいい、言つてから行け」

……ほんと、可愛い嫁さんですよ。

「さて、今夜は寝かさないうぜ？ リヴェリア」

「お手柔らかに」

リヴェリアの手を取ると、顔を少し赤らめながらしかし抵抗する素振りはない。

どうしてくれようか——と俺は頭の中で色々考えていた。

「副団長がホームを開けつ放しにしてる訳にもいかないのだから……か。起こしてくれたら送つたのに」

厳密にはリヴェリアが起きる気配もホームに向かう気配もわかつていたのだが、俺に気を遣つて起こさなかつたリヴェリアを尊重しなければと思つただけである。

「さて、俺も帰るか」

色々汚れたりもしているが掃除はしない。この家には3度の飯よりも掃除が好きな変態がいる。

「旦那様あつ!! この部屋が掃除を求めてる気がしたので帰ってきましたあ! いいですか? さつそくいいですか?」

「ああ、うん」

樽をすればなんとやらとはこの事か。

「いやったあー! 掃除掃除い! 宿の掃除もしてましたがあそこ狭い! それに結構綺麗で掃除のしがいが無い! ああ……ここはなんて素晴らしい場所なの!?! 掃除してたらお給金も衣食住も全部保証なんて控え目に言って最高! はあ……! 生きてよかった!」

「はいはい、旦那様の前ではしやぎ過ぎないの。先に別の場所掃除するよ」

「ぶつちやけ掃除出来るなら何処でもいい! あつ、やめて。そこ引つ張らないで。首が、首が絞まつ」

流石に1人だと手が回らないので他に2人程雇ってはいるが、この広さを3人で回せるのはその中に掃除好きの変態がいるからか。

さて、帰ろう。

「……………ん？」

朝日を浴びながらぶらぶらとホームに向かって歩いてしていると外壁の上にアイズの気配を感じた。

「こんな朝早くから外壁の上で知らない気配と訓練……まさか。
「色恋沙汰ですか！」

ぶつ飛ばされてるのが丸分かりだがそんな事は気にしない。

あのアイズが他のファミリアの男と一緒にいるということが問題なのである。
「ワープ」

そんな野次馬根性で覗いてみれば、まあ真面目な訓練だった。

愚直にアイズに教えを請う兎の様な少年と、四苦八苦しながらも実践で教えようとするアイズ。

「若いつて、いいなあ……………」

何がいつて外壁で訓練出来るところ。

今の俺とアイズが外壁こんなところで訓練なんてした時には崩壊は必至。

修繕費とかお説教とか色々考えただけで面倒。

その点ダンジョンとはなんと素晴らしい訓練場所か。壊れても勝手に直る壁、広い場所。モンスターなんて30階層あたりならまず近寄ってこない。というか近づいた時点で消し飛ぶから気にしない。

そんな事を考えながら訓練風景を見てみると、不意にアイズと目があつた。

「あ」

「あ」

「え？……ぶべらっ!?」

思いつきり入ったなあ……見事に意識が飛んでやがる。

しかし少年を助けるべきか俺に弁解するべきかでオロオロしてるアイズにそろそろ助け舟を出してやるべきか。

「先に少年を介護してやれ。な？」

「……はい」

意識を失つてる少年にアイズがしたのは膝枕。お兄さんはアイズをそんな子に育てた覚えはないぞ!!

「膝枕は……どうして？」

「リヴェリアに、男の子はこうすると喜ぶって……でも全然、喜んでくれない」

「ああ、うん。精々悩むんだな年少少女よ」

丁寧な解説して自覚させる事も出来なくはないがそれは面白くない。

願わくばこの組み合わせが成立しますようにと。

「あの……それで、訓練の事は」

「わかっている。聞かれたって言わねえよ。俺としては是非とも続けて欲しいくらいだ。そもそも俺は「ロキ・ファミリア」の人間じゃないからな、とやかく言う資格は無い訳だけど……そうだな。黙ってる代わりに、何でこの少年に訓練をつけてあげようと思っただのか教えてくれや」

「はい。この子の名前は——」

アイズが話してくれた事を纏めると少年の名前はベル・クラネル。前回の遠征で色々あって少年を傷つけてしまったからその償いの部分はあるけれど実際は少年のその強くなる早さの秘訣が知りたい——と。

「ふーん。なるほどねえ……」

冒険者になってまだ1ヶ月くらいなのに10層に辿りついてる、か。

まあ、そういう常識外れの成長つてのは大体神が関わってるもんだ。力を使ったか、もしくはそういうスキルが発現したか。成長促進のスキルなんて聞いた事ない。というか俺も欲しいが、もしこの少年がそんなスキルを持っているのだとしたらそれは全世界に1人だけのレアスキル。

先の訓練からわかるのはこの少年はひどく真つ直ぐだ。おそらく嘘なんかは苦手な部類であろう。

という事は、少年の主神が考えるのはスキルの隠蔽。成長促進のスキルを持っている事すら知らされてない可能性が高い。

つまりこの少年と訓練していてもアイズがこの少年の成長の秘訣を知る事ができる可能性は限りなく低い訳だが——まあ、無粋な事は言うまい。アイズもどことなく楽しそうだし。

「何か、わかりましたか？」

「いや、流石に少し見ただけじゃ何も」

「そう……ですか」

そんな事を話していると、少年が起きそうな気配がする。

「ん……え、うわああああ!!」

「ふむ、なるほどこういう事か」

予想以上に少年が純粹すぎるという事か。まあ確かにご褒美だな、俺だつてリヴェリアによくやつてもらった。それが意識してる女の子に気絶してる最中に膝枕つていうのは中々どうして複雑だ。

「……ん？ どうした、俺に何か？」

訓練を見られた。

アイズが怒られる。

つまり訓練停止。

そんな事を考えているのが丸分かりな表情をしていた。なるほど、これは俺の考えていた事が現実味を帯びてきた。

「あのつ、アイズさんは悪くなくてっ!? 僕が無理を言っつて訓練をー!」

「あー、俺は【ロキ・ファミリア】には所属してないから君とアイズの訓練をどうこう言うつもりは無いし、仮に所属していたとしてもどうこう言うつもりは無い。だから安心してくれ——つと、1つだけ聞いてもいいかな」

「は、はいっ!」

「君の主神の名前は何かかな?」

「ヘステイア様……ですけど」

「なるほどロリ巨乳か」

「え?」

「ああいや、何でもない。さて、邪魔しちや悪いしそろそろ俺は行くよ。訓練頑張つて」

「はいっ! ありがとうございます!」

「ありがとうございます」

「ああ、それと」

ひゅっ、と少年の耳元に近づいてアドバイスをば。

「アイズは強敵だから頑張つて。お兄さんは応援してるぞ」

「なっ——！」

少年の顔が真っ赤に染まった。

「どうしたの？」

「な、何でもないですっ!?!」

外壁を飛び降りながら、上擦った少年の声を聞いていた。

四話

「ハル君。ヘステイアの根城はここだったはずですよ」

「根城で」

せめてホームと言ってやりなさいよ。と思わなくもないがどうでもいいので放っておく。

そもそも何でルーナがついてきているのかと言うと、まあ端的に言うところだとゴネられた。ヘステイアの住んでる場所を探しに行くと伝えに行くはずだったが、何故か道案内を申し出られ、今に至る。

此方を見上げるルーナの顔には前面に『褒めて』と出てる。ついでにドヤ顔。

確かに探す手間が省けたのはいいが、ルーナを褒めて調子に乗らせると後が面倒くさい。けどまあ遠征についていく事を教えておくいい機会か。

「はいはいいい子いい子」

「えへー」

「あ、「ロキ・ファミリア」の遠征についていく事になった」

「え……へ!? 聞いてない! ロキめ、とっちめるッ!」

「あー、落ち着け。代わりにルーナの好きなものなんでもいいから一つ遠征の報酬として出させるから」

「いいんですかつ！　じゃあ私『豊饒の女主人』の新作ケーキが食べたいです！」

「うん、快く食べさせてくれると思うよ」

「この神ちよろすぎ。」

「ハル君の残してくれたお金を生活に必要な物以外で使う訳にはいきませんからね」

「……全く、この神は変な所で真面目だ。」

「まあいい。取り敢えずヘスティアに話を聞きに行こう」

「そうですねっ。レアスキルかあ……ふふ、レアスキル……なんていい響き」

例に漏れずルーナも娯楽に飢えているようだ。とはいえ所構わず言いふらして回る

事はしない。俺がさせない。

そもそもこれは、俺の好奇心故だ。ルーナに勝手な事はさせない。

「お邪魔するよ、ヘスティア」

「ん？　君はルーナじゃないか。こんな時間にどうしたんだい？」

「ルーナには案内してもらっただけで、用事は俺が」

「おや、君は【最強】君じゃないか」

「……その2つ名はあまり好きじゃないな」

「そうかい？ まさに君の事じゃないか。それで、最強君はボクに何か用かい？」

「ベル・クラネルの未確認スキルについて」

「なっ」

あ、凶星の反応。

「……ほう？ ハル君が話してくれた推測の話は本当だった!! さあヘスティア詳しく話を聞かせなさい！」

「恨むぞ最強君」

「代わりと言っちゃなんだが言い触らす真似はしない。ルーナも、もちろん俺も。ただ俺が『成長を促進させる』スキルに興味があつてな。どんなのか知りたかった」

「スキルの詮索はルール違反。それは重々承知。ましてや他人のホームに押し掛けてなんて最低と罵られても文句は言えない。でもっ！ 私はここでヘスティアにレアスキルの話を聞けなかったらオラリオ中の神にある事ない事言いふらしてしまいそいたいつ、何するんですかハル君！」

ゴツンと一発いれておく。

それじゃ脅しじゃないかバカ神。

「うちの主神の言い分は全く気にしないでくれ。情報料が欲しいと言うなら言い値を払おうし帰れと言うなら帰る」

「えーそんなのつまらないですよ。あ、いえなんでもありません。ごめんなさい」

バカ神は視線で黙らせておいて、ヘスティアの返事を待つ。

「……ふう、わかった。話すよ。その前に確認だ、最強君。君はベル君にスキルの事を話したかい？」

「いいや、何も」

「ならいい。あの子は嘘が下手だ。スキルの事を聞かれたら神相手に誤魔化せるとは思えない」

隠し通せないだろうから本人にはスキルの存在を教えない、と。大胆な事を考えるもんだ。

「ベル君に発現したスキルの名は【情景一途】リアリスフレゼ。忌々しくもヴァレン何某に向けたベル君の想いの丈がスキルになった形さっ！」

「想いがスキルに現れる……そんな事が？」

「ボクだって知らなかったさ！ だから未確認のスキルであって、あの純粋なベル君だから有り得た今後現れるかもわからない成長促進系のレアスキル。こんなおいしい話が流れたら神なら放っておかない」

オラリオ中、もしくは全世界から注目される存在になるかもしれないところか。

しかしあの少年、そんなにアイズの事が好きか。これは応援のしがいがあるじゃあな

いか。

「[ゲート]」

「それはハル君ちよつと洒落にならないからああああ!」

大丈夫。死にはしない。

ただ俺が開けないと出れないだけで。

取り敢えず話が終わるまでおとなしくしてろ。

「そもそも少年とアイズが出会う機会なんてあったのか?」

「ベル君は一度、彼女に助けられてるんだ。5階層でミノタウロスに襲われてたところを間一髪でね。多分、というか確実にその時だね」

「ふーん……」

上層にミノタウロスねえ……まあ、何があつたかは知らないがなるほどなるほど。

「これはもう、決定的だ。俺は、ベル×アイズ派だ!!」

「今の流れはボクとベル君が結ばれるのを応援する流れじゃないかー! 裏切り者!」

「これはアイズとベルが結ばれるのを応援する流れだろ。俺は全力で応援する」

「最強君が敵に回るなんて……!?!」

「と、言うわけで聞きたい事も聞けたし俺らはこれで」

「……ああ、限りなく最後の流れはいらなかったと思うけどね!」

「娘も同然のアイズが少年と一緒に訓練してるんだ。これは応援しない手はないだろうか？」

「……は？ 最強君、今なんて？」

一瞬でヘスティアの目の光が消える。

それで俺は自分の失言を悟った。

そういえば所属の違う人間同士が集まるのはあまりよろしくない行為だったな。

所属してないファミリアにお邪魔する事はよくあるから普段あまり意識していなかったが、こんなところで墓穴を掘ってしまうとは思わなかった。心の中で少年に謝罪しておく。まあそう悪い事にはならないだろうと。

「じゃ、そういう事で！」

「あつ、待て！ 逃げるな最強君！」

ともかく、ヘスティアにそれ以上の情報を与えるわけにはいかない。少年がヘスティアに問い詰められればバレてしまう事ではあるが、まあ気にするまい。それを乗り越えてこそその愛情だ。頑張つて障害を跳ね除けられる程の力を手に入れてくれたまえ。

「【ゲート】」

ルーナを取り出し、憤慨するヘスティアを背に俺は走り出した。

「あ、ううは」

ルーナをホームに放り込んでからそういえば朝から何も食べてない事を思い出す。食事が出来そうな所を探していると昔馴染みが開いたという所を見つけた。

『豊饒の女主人』。久しぶりだ」

そーいやルーナがここの新作ケーキを食べたいと言っていた。

明らかに開店準備ではあるがそんなのを気にする俺ではない。押し通る。

「お邪魔するよ」

「申し訳ありません、お客様。今は準備中でして」

見た目は可憐な少女だが、どこか腹黒そうな少女。

「シル、どうされたのですか」

潔癖そうなエルフ。

「なんニヤ。お客様、今は準備中だニヤ」

見た目バカっぽいキャットピープル。

「癖の強い少女達だ事。お兄さんちよつと張り切っちゃうぞ」

瞬間、シルと呼ばれた少女以外の全員が戦闘態勢をとった。

戦闘に携わっている人達は遅かれ早かれ戦闘態勢をとっているが、シルという少女は

こんな状況でも笑顔を保っている。

よほど肝が据わっているのか、あるいは――

「あ、ついついその癖で挑発しちゃったけどこれじゃ完全に俺が不審人物じゃん」
ポン、と手を叩いて納得する。

ならば俺の無害を証明する証人を呼ぶしかない。

幸運な事に警戒して襲いかかってくる人はいないようだし。

「おーい、年増！ いるんだろ、出てこい！」

「煽りを隠そうともしない態度はハルだね。全く、面倒な奴が帰ってきたもんだ」
年増呼びわりに反応を示さないミアは随分と大人になったようだ。つまらん。

「おひさ」

「あの、ミア母さん。この人は……？」

ミアを除いたこの中で最も強いであろうエルフの少女が代表して尋ねる。

「アタシの昔の知り合いさ。ほら、アンタ達は開店準備！」

ミアが一喝すると、こちらを見ていた従業員達が一斉に作業に戻る。

「金はあるからご飯食べたい」

「ハア……食べたらずぐ出て行きな」

「りよーかいいりよーかい」

カウンター席に座ってミアの料理を食べていると、先程のエルフの少女が歩いてくるのを感じた。

「あ、ちよつとちよつと」

「……私、ですか？」

「そうそう。ああ、警戒しないで。エルフが肌の接触を嫌うのは知ってるから」

露骨に警戒された目を向けられるとこつちも悲しくなってしまう。声を掛けたのといい店に押し入ったのといい完全に俺が悪いのだから仕方ないけど。

「それで、何か話が？」

「特に用があるって訳じゃないけど、ほら、さつき吹っかけてごめんね？」

「いえ、私はなんとも思っていないので。それにしても先程の威圧は明らかに私よりも手練れのそれでした。しかし私は貴方の顔は見た事ありません」

「まあ、そうだろうね。ここ数年ずつといなかったし、それよりも前は表に出る事が殆ど無かったし」

「……つまり、引きこもりだったと？」

「ち、違うし!!? バリバリダンジョンで稼いでたし!!?」

引きこもってた次期はあったけど、鍛錬は欠かしてないし!?

「……貴方は面白い人ですね」

「いや、君の方こそ。まさかエルフが初対面の人にこんな事を言うとは思ってなかったな。俺の知ってるエルフは初対面だとすっごく分厚い壁があったから」

「……あなたがとっつきやすいエルフだと感じるなら、それはそこにいるシルと今時珍しく純粋な少年のお陰、でしょうか」

「悪いがその純粋な少年は君やシルとくつつける訳にはいかないんでね！」

ヤツめ、無自覚にハーレムを形成するつもりか!? 女に免疫ないフリしてそこら中で女引つ掛けてんじゃねえか!

「それは聞き捨てなりませんね。クラネルさんはシルと結ばれる運命だ」

「そんな運命俺がぶち壊してやる」

「おいハル! うちの従業員を引き止めてるくらいなら帰りな!」

年増からお小言を食らっちゃまった。仕方ない帰るとしましょうか。

「じゃあな、エルフちゃん」

「……そのエルフちゃんというのはむず痒い。リユウ、と呼んでください」

「ふうん、それじゃありユウ。恋愛ってのは恩なんかで譲るもんじゃないんだぞ?」

「それは、どういう……?」

「わからないならそれでもいい。ただその感情を自覚した時、シルに恩義があるからと

身を引いたら俺が引きずり上げるから覚悟しておけよ？」

「はあ……」

それでも勝つのはアイズだがな！ とは言わず俺は開店準備に追われる豊饒の女主人を後にした。

五話

そして遠征の日。

「んー、いい遠征日和だ」

「ハル君、気を付けてくださいね？ 絶対に死んじやだめですよ！」

「安心しろ、何があっても死にやしないから」

そう、元々この遠征の目的地59階層な上に、俺は基本的に手を出さない。まあ、手を出さない事で色々なやつかみもあるかもしれないが、その辺りはフィンがなんとかしてくれるだろう。

「ハル、そろそろ出発だ。君は、僕たちと一緒に来てもらうよ」

「へいへい、それじゃあ行ってくる」

「ほんつとーに、気をつけてくださいいね!？」

「わあつてるって！ 心配しすぎなんだよいつもいつも！」

早くいけど、とフィンを急かす。いつもそうだ。ルーナは俺を「ファミリア」の一員にしてからダンジョンに向かう度にこうしてしつこいくらいに言うてくる。確かにうざったくもあるが、それ以上に気恥ずかしい。

「さて、何かあるのかな」

ルーナの事は頭の外に追いやり、フィンが予感した災いに思いを馳せながら、「ロキ・ファミリア」率いる遠征隊はダンジョンに足を踏み入れた。

ノンストップで18階層まで向かう途中、血相を変えてこちらに向かって逃げてくる冒険者がいた。

「……お、お前らも逃げ……って、「ロキ・ファミリア」!？」

「何が、あつたの？」

「ミノタウロス。ミノタウロスが、この階層にいやがったんだ……!？」

「ミノタウロス……何でこんな上の階層に？」

「それと、俺らが逃げる時に、ミノタウロスに襲われてる白髪のがきが——」

その言葉が終わるよりも早く、アイズが風になって走り抜けた。

「あつ、アイズ!？」

白髪のがき……十中八九、あの少年か。それにしても出来すぎている気がするが……いや、考えても仕方ない。追うか！

「よっしゃ、俺も！」

考え事をしているうちに周りに人がいなくなっているがまあそれはそれ。本気だしたらすぐ追いつけるしね？

「ああ、そう言う事」

俺が戦闘音がするところに顔を出してみると、ロキ・ファミリアの面々を足止めするオツタルがいた。

アイズの姿が見えないからもう走り抜けたのだろう、あの白髪の少年に向かって。

「んじゃあ、一発ぶちかますぞ。歯あ食いしばれ」

俺の接近に気がついたオツタルが、素早く大剣を構えて防御の姿勢をとる。

ドゴオン！

そんな大きな音とともに、オツタルが壁に叩きつけられる。

ありや、大剣が折れてない。手加減が過ぎたか？

「さて、お前らはアイズを追ってくれ。俺はコイツと話があるから」

「ああ、感謝するよ」

走っていくフィンたちを見届けてから壁に叩きつけられてから動いていないオツタルに話しかける。

「オツタル」

「話す事は何も無い」

「まあ、何をしようとしていたかはわかるが、あの少年は見た目よりもずっと強いぞ。それに、男なら同じ人に2度も助けられるなんて真似は嫌だろ？ 安心しろ、お前が望んだ結果になるさ」

「……そうか」

「まあ、そんなわけで自分の失敗を悔いる必要はない」

「……感謝などしない」

「感謝？ 吐き気がするね。お前らの事は好きじゃないんだ。あまりあの少年にちよつかい出すようなら——潰す。そう言っというて？」

「起き上がるうとしたのでもう一度壁に叩きつけてから俺もフィン達を追って走り出す。」

俺も、少し気になってるんだ。少年の勇姿が。

さて、そこには。

「あああああああ!!」

「ヴモオオオオオオオ!!」

両者一步も引かず。 駆け出し冒険者とLv2相当の怪物が対等に。

これが、冒険。これが、情景一途。

「ははっ、ますます応援したくなっちまうだろうが」

格下が格上に挑む、そして打ち勝つ。そんな物語染みた光景が俺の心を震わせる。それはロキ・ファミリアの面々もそうだろう。フィンだろうとベートだろうと、この場にいる誰もがベル・クラネルとミノタウロスとの決闘に釘付けになっている。

「ファイアポルトオオオオオオオ!!」

ベル・クラネルの咆哮が、その決闘に決着をつける。

ミノタウロスが爆散し、灰と化す。

死闘を繰り広げた少年は。

——立ったまま、気絶している。

「おっと、ステータスならまだしもスキルを見るのはよくない」

ギリギリ服が残っていて見えない部分に手を伸ばそうとしたアイズの手を掴む。

「……………」

「駄目だ。そんな事したら俺はお前を軽蔑する」

懇願するようにこちらを見るアイズを叱る。

「……………めん、なさい」

「うん、わかればよろしい。——フィン、俺は少年を上まで連れて行く。俺が戻るまでに
どんどん進んでてくれ」

「ああ……ベル・クラネルは任せたよ」

「おう、任された」

ついでに魔法で偽装した小人族バルウムの少女も受け取る。

普通にしていれば少年からも、俺やルーナ、ヘステシアからもスキルの事は漏れる心配はない。ルーナが漏らしそうに見えるがあれは俺に構って欲しいだけだ。

そんな事を上に向かって走りながら考える。

「俺にこんなスキルがあつたら、な。父さんや母さんを死なせずに済んだのだろうか」

いや、そんな事を考えても仕方ないか。もう過ぎた事だ、仮定の話はよそう。

変な考えを振り払うように、俺は走るスピードを上げた。

「そっか、ベル君はミノタウロスを倒したんだね」

「ああ、久々に心踊ったよ。物語みたいな、いい戦いだった」

「そっか。そっか……すごいね、すごいよベル君」

愛おしそうに、ヘステシアは少年の頭を撫でているのを見ていた。

「ところで……ベル君のスキルはバレてないかい!? 服がぼろぼろになってもう少し

でスキルまで見えそうだったじゃないか！」

「ああ、それはさせてない。万が一の可能性を無くすために俺が少年を上まで連れてきたんだから」

「……ああ、ならいいんだ。最強君は戻らなくていいのかい？ 遠征なんだろ？」

「俺はロキ・ファミアリアがどの階層にしようとするか追いつける。それよりも、少年に初めてどうの一言でも送りたくてな。これで少年もLv. 2だろ？」

「一ヶ月でLv. 2。たしかに凄いいけど……後が心配だなあ……」

「有り得ない速度なんだ。それは仕方ないってもんだろう。ま、俺がフォロー出来る時はしておくし、リヴェリアあたりにも頼んでもいいし」

「ロキのところへ貸しを作るのはやだ」

「お前からまだどنگりの背比べ続けているのか。よく飽きないな」

「ふんっ、ロキが懲りずに突っかかってくるだけさっ！」

「ん……」

へスティアと他愛もない話をしていると、少年がようやく覚醒したようだ。

「おはよう、ベル・クラネル」

「おはよう、ベル君」

「神様……と、あなたはあの時の」

「そーいや名乗って無かったな。俺の名はハル。自己紹介は手短かにいくとして、本題だ。ベル・クラネル」

「は、はいっ」

「俺やロキ・ファミアアの幹部達が証人だ。お前はしっかりミノタウロスを倒してLv. 2になった。おめでとう、ベル・クラネル」

「Lv. 2になったのはボクが保証するよ。なんとってステータス更新したのがボクだからね！」

「……は、はいっ！ ありがとうございます！」

状況を飲み込んだ少年が、勢いよく頭を下げる。

「ああ、そうだ。なんか困った事あったらギルドで俺の名前を出して。受付嬢は俺の名前知らない事があるから知らなかったらなんとか上の人に確認してもらって。俺が手を貸せる事があつたら手を貸すよ」

そう言つて、ベルに一つの宝玉を渡す。

「こ、こんな高そうなもの受け取れませんか!?!」

「そんなに高価なものじゃないし、ただのお守りみたいなもんだ。Lv2に上がったお祝いとして受け取ってくれ」

「それじゃあ……ありがたくいただきます」

「ポーチにいれるなりなんなり、外に出る時は身につけておいてくれると嬉しい」

「よくわかりませんが、わかりました。常に身につけておきます」

「そうしてくれると俺もありがたいや！」

さて、ここから先は主神と2人にした方がいいかな。積もる話もあるだろう、という事で俺は行く事を告げた。

「色々、ありがとうございました。ハルさん」

「良いつて事よ。未来ある若者に先行投資ってヤツだ」

ベルとアイズを結ばせるのに邪魔になるようなヤツは排除しておかないとね。

六話

結局、合流出来たのは50層のキャンプ地であった。

あの後、待ち構えたようなルーナに見つかってホームに泊まる事に。どうせいつでも追いつけると言う事でゆっくりしてたらもうフィン達はこんなに深くまで潜っていたのだ。

歩いて行くのは面倒なので「ワープ」を使ったが。

「遅かったね、これから先にいないのは少しばかり不安だからどうしようかと思ってたんだけど」

「思ってた以上にお前から早かったわ。どうしようもない時以外はこの先だろうと手を出さなくていいんだな？」

「ああ、それで頼むよ」

「わかったよ。それでいこう」

フィンに確認を取ってその場を後にする。ちなみにだが俺のテントは野営地の少し離れた場所にある。リヴェエリアと一緒に良かったかと思っただけだからね。

「暇だし、寝るか」

野営地から離れているから人通りも殆どない。見えるのはトイレにかけていく人達だけだ。

出発は明日の朝イチなので、今から寝るのも悪くない——と思っていると。

「ハルさん……起きて、ますか？」

「暇だから寝ようと思つてたところだけど、動きたさそうな目をしてるな。いいよ、付き合つてあげる」

「ありがとうございます」

「ただ俺は反撃しないから、思いつきり向かつてきなよ。反撃して怪我させない保証は無いからね」

「はい……わかりました」

あ、ちよつと不服そう。

怪我させるのは厳禁とフィンからも言われてる事だし仕方のない事だ。俺も反撃して楽しみたいけど駄目なんだ。わかつておくれアイズよ。

「じゃあ……行きます」

「おう、来いよ」

一階層上がったところに俺たちはいた。ここはボス部屋だから雑魚が湧く心配もな

いし、ボス自体はフィン達が先に倒してるから安心。

【目覚めよ^{テンベスト}】

前回とは違ってアイズも最初から本気だ。反撃出来ないことを惜しみつつ、俺はアイズの攻撃をいなしたり避けたりする事に徹した。

「むう……一歩も動かせなかった」

「はっはっは、そうむくれるなアイズ。オラリオ中の冒険者から狙われても傷一つ付かないと豪語する俺がアイズ一人を相手にそんな事あるわけないだろ。まあ……レベル差もあるが、絶対的に経験値が足りない。アイズにあと200年程の経験値があれば俺も一歩も動かすは無理だったな」

「私、そんなに生きられません……」

「ものの例えだ、気にすんな」

はっはっは、と笑ってアイズの頭を撫でる。何より自分より遥か上の高みを知っているのはいい事だ。俺だってまだ両親の面影を追いかけてるさ。影も形も見えないけど。

俺がオラリオ中の冒険者を相手にして無傷でいられるのも経験値の差が大きい。経験の差が千年も空けば例え同じレベルだとしても赤ん坊と大人ぐらい違う。赤ん坊がいくら増えたところで大人が負ける道理はない訳だ。

「さて、これ以上は明日に差し障るから早く帰るぞ。フィンに怒られてしまう」
「はい、わかりました」

「遅い」

「えー」

「いいかい、君は怪我とか体調不良とかとは無縁だろうけど。アイズは絶対にならないとは言い切れないんだ。大方アイズの攻撃を躲すのが楽しくてついか言うんだろうけど皆が皆君みたいに不老不死の肉体じゃないんだ。わかってるかい？ 明日は大事な攻略なんだからもしもの事があつたら——」

などと二時間。

途中で「フィンも体調不良になるかもしれないからこの説教も無駄じゃねえ？」と
いつてからさらに二時間。

流石に疲れた。夜もどっぷり更けてるし。あんなに怒る事なくない？ そりゃあ興
が乗ったのも茶化したのも俺が悪いけどさー。

「ちつ……あの中年め。可愛い容姿してるけどジジイに片足突っ込んでるんだぞ」

「へえ？」

後ろを振り返らず、全速力で逃げた。

「眠い……」

出発前のミーティングがあるとリヴェリアに叩き起こされ、寝惚け眼を擦りながらフィンの話を聞く。

「それじゃあ51階層から先を攻略するメンバーを紹介していく。まずは僕、ガレス、リヴェリア、アイズ、ティオナ、ティオネ、ベート、ハル。そしてサポーターにラウル、レフィーヤ。鍛冶師として椿にも付いてきてもらう」

呼ばれた俺の名前に、不満気な雰囲気上がる。ま、そりやそうだよな。ロクに知りもしない相手に深層という場所に挑む機会を奪われたんだ。いい気はしないわな」

「さて、今回はヘファイストス・ファミリアの鍛冶師達に加えて、とあるファミリアに所属しているハルという助っ人を呼んでいる。本来なら行く前に説明するべきだったんだが、こつちの方が手っ取り早いと思っでここで説明する事にした。さて、ハルとアイズ。前に出てきて」

「へいへーいっと」

「はい」

「さて、みんなハルの実力が気になつてるよね？ 色々な神の事情おとなで所属とレベルは明かせないけど。ハルの強さならここで明かしておかないとみんな納得しない。なら、さ

せればいい。アイズ、剣は持つてるね」

「はい。持ってます」

「うん、準備がいいね。じゃありヴェリア、僕の槍を」

「了解した」

リヴェリアから二本の槍を受け取ったフィンは石突きの方を地面につけながら、こう宣った。

「僕とアイズで一分間ハルを全力で攻撃する。その間、ハルが傷一つ追わなかったらみんな、認めてくれるね？」

そりゃあ……といった、どうせ無理だろみたいな雰囲気が出る。まあ実力も出来れば隠しておきたいが回避だけに特化されてると思われておくのもいいか。ロキ・ファミリアはフィン達がいるから言わずもがなだけど、鍛冶師達はあのヘファイストスだ。真っ直ぐな神だから大丈夫だろう。帰ったら行かないとな。

「わかった。いつでもいいぞ」

【目覚めよ】
テンペスト

【ヘル・フィネガス】

おっと、フィンも本気か。なら俺も手ぐらいは使わないと失礼かな。

「団長の魔法だ……」

「初めて見た……」

「すげえ、あの猛攻を一步も動かず捌いてるぞ……!?!」

「一度も聞いたこと無いけど、アイツ何者なんだ!?!」

ああ、外から聞こえてくる驚きの声が気持ちいい。俺を雑魚だと思つてカツアゲしようとしてきてLv2くらいの冒険者を半殺しにした時みたいだ。畏怖の視線がいいね。

「かつこいいいな、ハル」

ボソツ、とリヴェリアが呟いたのを俺は聞き逃してはいない。

リヴェリアを盗み見ると顔を赤くしてそっぽを見ていた。呟いた言葉を聞かれたのを察したのだろう。可愛い。

「はあ……これが、ハルの実力だ。これで、連れて行くのに反対の人はいないね?」

流れ出た汗を拭うフィンの質問に否を言える人はいなかった。

「さて、20分後、出発する」

「まさかフィンまで魔法を使うとは思わなかったよ」

休憩してるフィンのところまで行きルーナ印のポジションを投げ渡す。

「飲め、元気が出る」

「ああ、ありがとう。ちよつと僕も興が乗っちゃつてね」

「ちよつと前にアイズにも渡ししてきた。これで消耗分は回復出来るだろ」

「助かるよ」

「お前とアイズが落ちれば俺が出る確率が上がるからな、そうしない為だ」

戦闘も出来る指揮官というのは貴重だ。後ろで指示を出すより前線にいた方がいち早く異常を察知出来る。臨機応変に対応できる。

フィン は並の敵じゃ落ちないし、揺らがない。オツタルはLv7とフィンよりも上回っているが、指揮の面をみるとフィンが大幅に上回っている。指揮、という面だけみると俺をも上回る。別に俺がボツチってだけじゃないぞ？　ちよつとソロで潜る事が多かったから指揮する機会に恵まれなかっただけだ。

「そうだね。僕が落ちるわけにはいかない」

「ああ、それを理解してるだけでもお前は強いよ」

指揮があるのとないのでは攻略の効率も段違いだ。俺の様に実力が飛び抜けてるヤツだと指揮も必要ないが深層は指揮が頭飛び抜けててそこそこ戦えるヤツがいなくて先に進むのは厳しいだろう。

「良かったな、フィン。指揮という面では俺を超えてるよ」

「それは嬉しいね。ハルは千年も大人数に指示を出す事が無かったのかい？」

「最初の百年くらいはあったんだが、最近やってないからな。指揮の腕も鈍ってるよ」

「そうかい。そろそろ20分だ。行くよ」

「おう、回復したか？」

「ああ——バツチリだ」

それは重畳。

こうして俺たちは深層へと足を踏み入れた。

七話

「さあ、ここからは足を止めちゃだめだよー」

走りながら、フィンがそう告げた。

当たり前だろう。ここからは58階層のボス、砲竜の補足範囲だ。

この階層に足を踏み入れるからには58階層を攻略する實力を持つていたわけだ。少しでも足を止めたりするとほら、この通り。

「まずい、補足された」

フィンが急かしみんなが足を早める。

そして、階層を無視して放たれる砲竜の炎弾に、俺は打ち上げられた。

「いやっほうー！」

まあ、俺にとつてはただの遊戯である。

気分は打ち上げ花火。だが、砲竜のクセに俺を狙うとは不遜なので、プチつと頭を潰しておく。

打ち上げ花火で遊べるのは一匹につき一回。そしてその一匹を倒すと他の竜は警戒して殆ど撃ってこないのだ。これはフィン達への砲撃も減るか？ ちよつと短慮が過

ぎたな。

「さて、フィン達は先に行ったか」

砲竜こんの補足なと範囲こで足止めをするわけにはいかないからな。

しかし一匹殺しただけで怖気付くなんてなんて臆病なヤツらなんだ。

「お？ 分断されたか」

ちようど半々くらいにわかれた様だ。フィンとしても本意じゃないだろう。大方誰かが落ちたからそれに付き添ったとかそんな感じか。そういえばリヴェリアの後継者とか言われているエルフがメンバーに入ってたな。ふん、凛々しさが足りないぞ後継者もつともリヴェリアは可愛らしさを凛々しきで隠しているとかがまたなんとも言えない雰囲気醸し出していて。うおつ、また狙ってきやがった。野郎、上等じゃねえか！

「そんなに下に来て欲しいなら行つてやるよ」

下に落ちると、ガレスが無双してた。俺もやりたい。じゃなくて、ガレスがいるなら手助けが必要になる事は無いか。

「よっつ」

無謀にも俺に近寄ってきた砲竜を叩き潰す。

「目上の人には伏せをしろって習わなかったのか」

叩き潰しておきながら言う台詞じゃないが言ってみたかった。次は生きてるヤツにやろうと思っただけどきどき攻めが圧倒的過ぎたのか、こっちに近寄ってくるヤツがない。全部ガレス達の方に向かって行ってるんだが？

もう一匹ぐらいきてくれてもいいのよ？ 今なら無慈悲に殺したりとかしないからさ？

そんな俺の祈りは通じず、一匹も寄ってこないが、代わりに見た事のない芋虫が寄ってきた。

「なにこれ、新種？」

「それ、体内から腐蝕液だすよー!？」

「おつ、情報サンキュー!」

テイオナがすかさずこちらに情報をくれる。こんな気配りが出来るところは素晴らしい。ポイント高いぞ。胸無いけど。

「なんか憐れみの視線感じる!？」

「変な事言っただけで手と足を動かせばカゾネス!」

「なにおう!？」

うむ、楽しそうだなによりだ。万一があるかもしれないと考えたが喋る余裕があるな

ら大丈夫か。

「しっかし、たくさんいるな」

こんな芋虫如きの腐蝕液が俺に効くとは思わないが、かかったら服が汚れてしまふな。

「なら——」

パアン、と音を立てて芋虫は弾けた。

腐蝕液も全部蒸発させる勢いで蹴ればいいだけだろう？

「こいつら警戒心とか無いのな！」

どんなモンスターも大抵は数匹殺せば警戒心を抱くもんだが、コイツは生物としての何かが破綻してやがる。

殺しても殺してもこっちに向かってくる数が消えない。それどころか増えてくる。

「はっはあ！ 楽しいじゃねえか」

芋虫おもちゃがわざわざこっちに来てくれるんだ。遊ばないのは損だろう？

「ほらほらほらあ！ もつと出てこいよ！」

砲竜はガレス達に任せるが、芋虫は面白いので俺が引き受けた。割といたと思つたんだが、興が乗って潰し過ぎた。もう残ってないんだ。

58階層から降りてくるヤツらも一匹残らず消してるからさすがに供給量が足りな

くなつて来たというところか。

「いやー、面白い敵だった」

なんか大量発生してるっぽいから見つけたら狩ろう。ちようどいいぐらいに蹴らないと腐蝕液が全て消えないから威力の調節に役立つ。芋虫にはお似合いの末路だ。

「おっと、そろそろ来るか……？」

フィン達の到着だ。ロクに休憩もせずに急いで降りて来たのだろう。随分早い到着である。

「——あれ、ハルはこっちに来てたのか」

「まあな、芋虫狩りしてた」

まだ砲竜達と戦ってるガレス達がいるが、俺がいる事で一安心とみたのだろう。それからこの階層にいる砲竜を全滅させるのにそう多くの時間はかからなかった。

「……少し休憩しよう。この先に行くのはそれからだ」

各々が床に座って水分補給をしている最中、俺は気になつている事を告げる。

「フィン気付いてるか？ あの手、何かおかしいぞ」

「ああ、ゼウス・ファミリアが残した情報によると59階層から先は僕らLv6でも動きが鈍る極寒地帯——」

「まあ、俺は大丈夫だけだな」

「——ハルは例外だから置いておくとして。59階層と繋がっている此処もかなり温度が低いと聞く。だけど、今はどうだ？」

「むしろ暑いくらいだよ？」

「アイズが敵に言われていた『59階層に行け』と言つてた原因がああ状況を作つてるんだらうね」

「ふーむ……」

訳知り顔で頷いてみるが詳しい事はよくわからない。敵？ うちのアイズを付け狙う敵がいるならそれは滅ぼさなきゃいけない案件だぞ？

「まあ、ハルはわからないよね。でも僕たちも詳しくわかつてるわけじゃない。取り敢えず休憩は終わりにして、先に進もうか」

決意を目に、片付けをして皆が立ち上がる。

そう、決戦の時は近い——。

八話

「うっわ。何これ密林じゃないか」

足を踏み入れた59階層は俺の記憶に残っている光景とは180度違う密林。

「何かがこれを引き起こしてるのだとしたら相当だぞ。これを討伐するのが俺の役目なのかね。まあ、そうであってもそうでなくてもロキ・ファミリアの面々が死ぬ寸前まで俺は見てる契約だからな。何が起こっても静観するしかない。」

正直リヴェリアが傷付くのは見たくないのだが。どうにかならない？

「リヴェリアだけ鼻肩するのは駄目だよ。こっそりフォローするのも駄目。わかった？」

「はいはい。わーってるよ」

渋々とそう呟く。

それと同時に、何か変な音が聞こえた。

この先から聞こえてくる、不協和音。あまり、聞いていたくない音だ。

「進むよ」

警戒度を上げて、フィンの声に従ってさらに進む。

ベートとティオナを先頭に、音の発生源まで進んでいくと、

「……なに、あれ」

ティオナの唇から、声がこぼれ落ちる。

「……これは、壮観」

その光景を目にした俺も、思わずそう呟いてしまった。

密林が姿を消して、灰色の大地が顔を出し。夥しい量の芋虫と奇怪な植物型のモンスター。

その、中心に。

「『宝玉』のモンスターか」

「寄生したのは、『タイタン・アルム』なのか？」

「寄生って?」

「モンスターに寄生するヤツがいる、そういう事だよ」

「ふーん」

結局倒す事には変わらない。それに俺は難しい事を考えるには向いていないからな。考える暇があれば敵対者は全て潰せばいいって思ってしまう。

「さて、気づいているか？」

「ああ——これは、予想以上だ」

今俺たちがいる灰色の大地。これが全てモンスターの灰であると。

その事実気づいたフィン達に震えが走る。

「ハル、手は出さないでくれよ」

「いやそりゃあ出さないけど。あれ、大丈夫か？ 相当強くなってそうだけど」

あの程度のなら俺ならば瞬殺出来る――が、そうだな。フィン達の成長ぶりでも確かめるとするか。あんなの屈するほどヤワじゃないだろう、こいつらは。

「俺は離れて見てるから、存分に戦ってこいよ」

「ああ、見ていてくれ。僕達の勝利を」

――ああ、成長を実感できた。

これが限りある寿命で生き抜く人達の輝きか。

フィンもガレスもリヴェリアも。

アイズだって模擬戦でわかっちゃいたけど、それでもモンスターと人じゃどうしても力がセーブされる。

ああ、みんな強くなった。

強い。本当に……その才能に嫉妬してしまいそうになる。

「俺は、1000年努力してもまだ9だつてのに……」

これは考えても栓無き事。

俺は落ちこぼれだが、それでも今は最強だ。

「ロキ・ファミリア」のみんなは勝利を噛み締めてる。

ボロボロになりながらもあの怪物に勝利した。

俺はそれを讃えよう。

だから、次は俺の番でいいよな？

「来いッ!!」

ゲートを通って取り出した剣を握りしめ、全速力で走る。

異空間から口を開き、今にもリヴェリアを呑み込もうとしている怪物を容赦なく蹴り

飛ばした。

「え……う？」

「さあ、ここからは俺の番だ！ 邪魔だから出来るだけ後退しておけよ！」

残念ながらリヴェリアに構っている余裕はない。

一瞬前まで死の危険が迫っていることによく気付いて顔の色が少し変わっている様をずっと眺めていたいがそうもいかない。

アレから目を離すと誰かが喰われる。

『バアアアアアアアアア!!』

他の獲物には目もくれず、怪物は俺に向かって一直線に突っ込んでくる。

本能でわかっているんだろう。俺から意識を離すとやられてしまうと。

「フツ——」

ポイツと剣をゲートに放り投げ、大口を開けて突っ込んで来る怪物を蹴り上げる。

剣は苦手なんだ。出したのはただのカッコつけで……ああつ、こんな状況にもかかわらずリヴェリアが白けた目を向けてきてる！

『バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

魔法の複数同時展開。

リヴェリアが生み出す魔法を遥かに上回るソレがぎっと数えただけで10は超えている。

なるほど全部撃ち落とす——！

やる事は単純明解！ 魔力で覆った拳で叩き落とす！

「ハッ！」

全部後ろを狙ってやがる。

俺が守らざるを得ない事に気付いていて、魔法を撃ち落とす事に専念させているとしたら——確実にあの怪物は。

「狙いがバレバレなんだよ！ 所詮は獣か！」

全ての魔法を撃ち落ちとした瞬間を狙って、異空間を通ってきた怪物が俺を捕食しようと大口を開ける。

「これでも食つてろ……よー！」

ゲートに眠っていた大剣を射出。

口を斬るつもりで放った大剣はしかし、何一つ傷つける事なく怪物の胃の中へ吸い込まれていった。

「ええ……ブラックホールのな？ 口の中に入ったものはなんでも吸い込んだり身体構造してるんですかねえ!？」

何それ超面倒。

そもそも明らかダンジョンの生き物じゃない。

俺が出張らないといけないレベルの敵なんてこのあたりの階層にはいないはずなわけで。芋虫みたいな新種はいるしなにやら不穏な気配が漂ってるけどそれは「ロキ・ファミリア」の面々に任せるとして、俺は本当は戦う事しか脳のない人だから。

1000年生きてれば多少は賢くもなる。

「うおつ、余計な事考えて現実逃避してたら掠った!？」

この怪物、意外と速い。

『バアアアアアアアアアア!!』

「考え事をしてたとはいえ、俺に擦り傷を負わせた褒美を与えようじゃないか」

ゲートから取り出したのは一丁の銃。

そこに込めるのは鈍色に輝く一つの銃弾。

「よくわからん怪物に……理不尽な最期を」

放たれた銃弾は、真っ直ぐ怪物の口に吸い込まれ。

——斬ッ!

そんな風に最後はあつけなく、身体を真っ二つにされて、怪物は地に沈んだ。

「うん、よくわからんが俺の出番もこれで終わりだろう」

「……ああ、そうだね。僕の親指もそう感じてる」

たしかにフィン達にとっては勝ち目がない相手ではあったが、俺も苦戦するようなのが迷い込んでくるのかと思いきやそうでもない。

しかも亜空間を通る奴だから迷宮にダメージを与えるような事にもならなかった。

「まあ何はともあれ、一件落着って事かな」

リヴェリアのめっちゃ怖かったけど澄まし顔で誤魔化してるのが何とも可愛いけどこれは家に帰るまでからかうのはやめておこう。

九話

帰り道の最中、団員達が軒並み毒状態になっているのを後ろから笑いながら着いて行ってたらリヴェリアに本気で怒られてちよつとへこんだ。

「手を出さないって言ったし。どうせ遠征に行くような連中だし」

「ハルがすっかり拗ねちゃったからベート、頼んだよ」

「ちつ、わかったよ」

拗ねてないし。

そんな事がありつつもメンバーの多くが毒に侵されている為、身動きが取れずに18階層でベートが帰ってくるのを待っているわけだ。

「ハルが取りに行ってくれればもう帰れたのにね」

「そうだね」

「お前はいつまでも子供っぽい……」

「1000年生きてても子供の心を持っている俺を褒めて欲しいね！ 何年たってもウ

ラノスみたいにやなりたくないけど」

若い人達に囲まれていると心がそっちに引つ張られてなんだかい。

「……………ん？」

「どうした？」

「いや、少年の気配を感じた」

「少年……………？」

「こつちの話だ。気にしないでくれ」

「そ、そうか？」

半分周りにほかのメンバーがいるのを忘れているリヴェリア可愛いと抱きしめたいところだが、今はそれどころじゃない。

少年のレベルでソロでここまで来るのはまず不可能。という事は何人かはわからないが少くとも小人族バルウムの少女は一緒だろう。

2人という可能性もなくはないが限りなく少ないだろう。少年は過信するタイプでもない。

という事はパーティーメンバーは多くて5人、少なくとも3人くらいだろうか。

Lv2になったのがつい先日なわけだからすぐ18階層あたりまで来るとは思えないから考えつく事は事故が起こって下に向かわざるを得なくなったか、運良くモンス

ターに出会わなくてサクサク進めてしまったかのどちらか。

「リヴェリア、回復魔法の用意をしておいてくれ」

「あ、ああ……わかった」

「フィン、申し訳ないが、何人かここに厄介になる人が増えるだろうがいいか？」

「余裕があるわけじゃないけど、他ならぬハルの頼みだ。引き受けようじゃないか」

「ありがとう。足りなくなるものがあつたらリヴェラから遠慮なく買ってくれ。俺の遠征の報酬から差っ引いてくれて構わない」

「ふーん、ハルがそこまでするなんて、随分入れ込んでるんだね。女？」

女に反応して一瞬嫉妬の炎を燃やしつつ私は正妻だから寛容ですという余裕ある表情を見せるリヴェリアは一見表情があまり変わらないように見えて内面がころころ変わってる。なんて可愛いんだ。

「ニヤニヤしてないで早く行ってこい」

「はいよ。それと、男だからリヴェリアをからかうのはよしてくれ。からかうのは俺だけの特権だ」

「はは、ばれたか」

「なっ……!」

なんだ、気づいていなかったのか。

俺、最初に少年って言ったよね？

少年が！

アイズの足を掴んで！

自分よりも仲間を優先して！

助けを求めた！

「くうー、お兄さんは見ていてとても楽しいです」

本人たちは俺の予想通り事故つて下に向かわざるを得なかったみたいでかなり瀕死
なのだけど。

「あの……ハルさん」

「俺の事は気にしないで！ 続けて！」

「運ぶの、手伝ってもらえますか？」

「あ、はい」

超至近距離で木の枝持ってバレバレのカモフラージュしてたのを全スルーされてア
イズの天然力の高さを思い知った。

瀕死の怪我してる少年達にも、アイズにも申し訳なく思う。

せめてもの罪滅ぼしにアイズも抱えて全力でキャンプ地まで移動した。

「ベル・クラネルの事だったんだね」

「そう。俺は少年の事を特別気に入っていてね」

「ハルでもあの超成長の秘訣とか気になるものなのかい」

「まあ、それもあるけど。他の理由があるんだ」

知ってる、なんて事は口が裂けても言えない。アイズを含めあの場にいた人は皆少なからず知りたがっているか。本人に聞いても本人が知らないから無意味なんだが。

「へえ……聞いても言ってくれなさそうな感じだね」

「フィンに……というか『ロキ・ファミリア』の連中には聞かせらんねえや」

少年とアイズが結ばれるのを願ってるなんて、それこそ言えない。

もつと少年が馴染んでくれればいいんだけど、そうもいかないかねえ。

「ともあれ、僕らも彼には助けられたと言ってもいい。遠慮なくハルのテントに寝かせているし、僕らが帰るまでの間ならなんの問題もないよ」

「ああ、少年達も喜んでくれるだろう」

さて、アイズが少年達を看病しているはずだし、野次馬でもしにいきますかね。

「むむ、アイズの胸も成長したんだな……」

うちの嫁さんも凛々しい服に隠れているが中々のものだぞ。そう、中々のものだ。

「さすがに娘同然の女の子の胸に顔を突っ込む勇氣はねえな……」

少年の行動を見てそんな事を思ったが、間違いなくリヴェリアに殺される。

アイズと話していると少年はずっと顔が真っ赤なのにアイズはそれに微塵も気付いていないというのがなんとも。

もつと恋愛面も教育しておくべきだったか。ちくしょう、過去に戻ってやり直したい。

「あと980年くらい若ければ俺もアイズにアプローチしてたのにな……」

いや、待てよ。その頃の俺だと弱すぎて相手にされないな。なるほど、俺にはリヴェリアが運命の人だったか。

「おい」

「どうした、リヴェリア。俺は青春を覗くという大事な使命が痛いから無言で首を締めないで」

「馬鹿な事をやっていないで私のテントに行くぞ。ハルの布団をひかねばならん」

「またまたー。そんな事言っておきながらさつきちよつと嫉妬したから可愛がつて欲しいんでしょ？」

「凶星でしょ？」

おっと、杖を振りかぶって何をするつもりで？

「死ね」

死にたくないからエスケープ。

「あつ、くそ。逃げ足の速いやつめ」

「？ 外から物音が聞こえたんですけど……」

「気のせい、じゃないかな……私は、何も聞こえなかったし」

十話

「なあ、ヘルメス。こいつ、このままだと死ぬけどいいのかわ？」

「……………」

「見捨てたのか、衝撃でだんまりしてるのかわかりかねるが。痛めつけたのは俺だけど、自分の眷属が大切ならすぐ動いた方がいい」

お前がやりたかった事も、それが少年を成長させる為だという事も全部わかる。

少年だつて常日頃ストーカー紛いの視線を浴びてるわけだし、それくらいじゃへこたれないだろうって気持ちはある。

けど。

「そのやり方、気に入らないな。お前らにお膳立てしてもらわなきゃいけない程、人間俺らは弱くねえぞ」

何故こんな事になったか、それは少年達を追ってヘステイア達が18層に転がり込んで来た時から遡ろうか。

かんぱーい！ という合図と共に、皆が飲み始める。

【ロキ・ファミリア】の面々に囲まれて恐縮しまくっている少年や甘味に目を輝かせる小人族バルムの少女、そして深層についてきた鍛冶師に絡まれている着流しの青年。

リヴェリアの回復魔法の効果もあり、普通に歩けるし喋れるようになっていて事に安心した。死にかけてる傍でふざけてる場合では無かったのをもう一度反省する。

「しっかし、少年の周りにはいつも女の子がいるな」

アマゾネス姉妹にアイズまで、強さの秘訣を聞きたがっているらしいが。

「何をしみじみしている」

「ん、リヴェリアか……一杯飲む？」

「遠征中に酒は飲まん。万が一があつたときに上の者が酔つてまともな指示が出せなかつたら駄目だろう」

「それもそうだな」

はは、と小さな笑いを漏らす。

うちの嫁さんはいつでも真面目だよ。ベッドの上でなんてあんなに可愛くおねだりしてくれ——おっと、嫌な予感。

「ハル」

「何かな」

「周りに聞こえてないからいいが、漏れてる」

笑いだけじゃなく声も漏れていたようだ。

多分、酔いが回っているんだと思う。

昔からあまり酒には強くないから普段は飲まないようにしているが、今日はなんか飲みたい気分だった。

「ごめん、少し酔ってるかな」

「全く、昔からそうだ。少しの酒でいつも酔うからいつも——」

小言を言いながらも俺の頭を自分の膝に持つてきたリヴェリアに甘えようとした時。

『うわああああああ!』

聞こえるはずのない神の声が聞こえてきた。

「ッ!」

ゲートを開きルーナ印のポーションを呷る。

月の加護の効果で強化されたポーションが酔いをも醒ます。市場では殆ど出回らない希少なポーションだが、作り出してる女神のファミリアに所属する俺は使い放題だ。ゲートの中は時間が経たないのをいい事にダンジョンに行く度持たされていた。

「ちよつと行ってくる」

「ああ、気をつけて」

18階層入り口へ向かう俺を見送ったりヴェリアは流石の切り替えの速さで団員達に指示を出していた。

「ヘスティアにヘルメスにリユーにその他大勢、か」

取り敢えず怪我とかは無さそうなので遠巻きに眺めているが、神がダンジョンの中に2柱もか。

ヘスティアは少年が心配だったんだろうが、少年と明らかに関わりがなさそうなヘルメスは何をしに来た。

そして、その他大勢と少年達との何やらギスギスした感じ。

「あの雰囲気……何やらひと騒動ありそう！」

またも野次馬根性を発揮させ、気配を消しつつベル達が入って行ったテントを覗く事しばらく。

「ふむふむなるほど……モンスターを押し付けられたのか」

マナーとしては最悪。だが、あの桜花とかいう青年の言い分もわかる。

赤の他人よりも身内の方が大事なのは誰だつて同じだ。

「ほら、少年が困つてるじゃないか」

部外者の俺が出て行くのは良くないし、何とか仲裁をとも思うが、悲しい事に俺はこの光景を眺める事しか出来ないんだ……！

「ほう、随分と楽しそうじゃないか」

「やありヴェリア。君も一緒に覗きしない？」

「死ね」

冗談なのに。

「あつ、逃げるな！」

「逃げに徹しても俺は最強なのだ！ あーっはっはっはっは！」

我が最高速度について来れる者などいない！

「おや、リユージュじゃないか」

「ツ!？」

驚かせてしまったようだ。

はっはっは。避けなきや俺の眉間にぶち当たっていたが、腕に覚えがあるようで何よ

り。お兄さんは嬉しいよ。

「ハルだ。覚えているだろう？ いや、覚えてない可能性の方が高い……？」

「ハルさん、でしたか」

「少年達と合流したと思えばいつのまにかいなくなっていたからおかしいとは思ってただけど、こんなところにいたとは」

「口外はしないでほしい」

「りよーかいりよーかい。俺としちやみんなで輪になって酒飲んでとかやりたかったんだけど、ゴタゴタでそうもいかないようだ。君達のせいだぞ！」

「はあ……」

「てなわけで」

ドン、と拝借してきた酒を置く。

「晩酌に付き合ってもらうぞ」

「私のお酒は飲めないのですが」

「嫌だと言われぬあたり嫌われていない事に喜ぶべきか。……いや、そんな事を言うてる場合じゃない」

ならばとルーナが貯蔵してたジュースを出す。もちろん勝手に持ってきた。

「酒じゃなくてジュースならいいだろう？」

「それなら、構わないですが……」

ルーナは神のくせに酒が飲めない。

だから俺が各地に出向きジュースを調達して来るわけだが、出来るだけ美味しいものを飲んで欲しいという眷属心だけどたまには持ち出してしまうのも眷属心。ルーナのお気に入り持つてきちやつたけど許してねと心の中で謝っておく。

カチン、とグラスを当てる音がする。

最初は2人とも無言で、グラスを傾けた。

「美味しい……」

「お気に召したようで良かったよ。これは俺が作ったものでね」

「貴方が……?」

「無駄に長生きしていると色んな事をやってしまうもんだよ。まだ夜は長い、少しばかり話してもいいか?」

「少し、興味があります」

「そうか、そいつは何より。それじゃあ……」

うちの主神は酒が飲めなくてね。そう、神なののだ。何度か勧めた事はあるんだが、いつもは俺に甘い主神は頑なに酒を飲もうとしない。何でかっつのは今は省くが、酒が飲めないならジュースをプレゼントしようと思って主神に何を飲みたいかって聞いた

んだ。

そしたら主神は「ハル君が作ってくれたものなら何でも」って言ってな。

その頃の俺はまだ若くて、L.V.Iの後半に来たくらいの弱さだった。死んでしまった親が残してくれた財産と、ソロでダンジョンに潜って稼いだ極少量の金で日々を食いついでいた。

え？ 何でソロかって？ 弱いやつで他のファミリアである俺を入れてくれるパーティーなんていなくてな。

まあ、そんな最中だ。日頃お世話になつてる主神に贈り物をしたくてな。酒は飲めないって言ってたからジュースでもと思つてたけどあの頃の俺じゃジュースなんて手が出なくてな。

うん、親の財産を使えばそりや買えたさ。でもそれじゃ意味ないって思つて、自分の稼いだ金で買おうって思つてがむしやらにダンジョン潜つてたら心配した主神に怒られてな。

「ハル君が作ってください」って。果実を買えるぐらいの収入はあつたから買つて一生懸命作つたんだ。

味？ 不味かつたよ。主神の為にと思つて美味しくしようとしたのが空回りしたんだな。何の知識もないガキにできるような代物じゃなかつた。

でも主神は渋い顔しながら「美味しい」って言ってくれた。

それからレベルも上がって収入も安定してちよつといいジュースを買っていても俺のジュースの方が美味しいって言ってくれる。

千年もジュース作りしてりやそりや美味いもんが作れるようになるってな。

あれ、言つてなかったつけ。俺、千年生きてんの。あつ、その顔保存しておきたい。基本的に無表情なエルフの嘩然とした顔つてとても需要あると思わ……ないですよねわかります。

「あんまり喋るのは上手くなくてな、伝わったか？」

「ええ、優しい主神ですね」

「ああ、俺にや勿体無いくらい優しい神ひとだよ」

本当に、いい神だよ。ルーナは。

「おかわりをいただいても？」

「おつ、いいねえ。じゃんじゃん飲め！」

リユーにジュースを注ぎつつ、俺は酒を取り出して呷る。

小つ恥ずかしい話をしてしまったからにやあ酒を飲まなきややつてらんねえ！

「あ、やべ。酔った」

「まだ一杯しか飲んでないのでは……？」

いくら飲んでも酒だけは慣れない。ルーナの酒嫌いがうつったか。リユーが、少し笑っているのが見えた。

「ああ、やっぱり笑ってた方がいい」

「気のせいではないでしょうか」

「気のせいじゃないな。エルフの表情の変化を捉えることには自信がある」

「何の自信ですか……」

「まあ気にしなさんな。酔っ払いの戯言だと思ってくれ」

あ、そういえばリヴェリア達に何も言ってるねえや。

……さて、酒飲も。

「どうしたのですか？　心なしか顔から生気が無いような気がします」

はは、気にしないでくれ。気にしたくないんだ。

十一話

「おはようリヴェリア。……リヴェリア？」

「正座」

「え？」

「正座」

「はい」

なるべく陽気な感じでいこうと思ったのが失敗だったのか、有無を言わさず正座させられ説教される事数時間。

アイズはリヴェリアの剣幕に目を逸らし踵を返した。フィンとガレスは顔ににやけ顔を作ってどっかいった。アマゾネス姉妹はリヴェリアにひと睨みされてどっかいった。少年達一行は触らぬ神に祟りなしとばかりにスルーしてどっかいった。

ようやくリヴェリアのお説教から解放された俺は、少年達が向かったというリヴェリアの街へ急ぐ。小耳に挟んだ話によるとアイズも付いて行ったという事だ。ヘステイアが完全に邪魔なので連れ去りにいこうと思う。

「モテる男はつらいなー、さすが少年」

ヘステイアを引き剥がさなければならぬが、それはそれとしてあまりリヴェラの街に寄ったことがなかった事を思い出す。中間地点にすらなり得ない場所だから寄らないのだが、機会があつたら寄つておこうと思つてすつかり忘れていた。

ガラの悪い奴らしいいな、という感想はそこに気になる奴を見つけた。

「ヘルメス……？」と、あいつはファミリアの団員か。何でこんな所に……？」

神ならこんなところで酒なんて飲むはずもないし、と。

「まあ、聞いてみりゃわかる話か」

野次馬根性を発動させ、覗きを敢行する。そもそもあんな大つぶらに覗きをしたのは「ロキ・ファミリア」の管轄内だからだ。こんな人通りもあるし誰が俺を見てるかわからないところで覗きがバレるような真似はしない。Lv. 9の身体能力とスキルを遺憾なく発揮させヘルメス達の会話が聞こえる位置を陣取る。

「……………へえ」

随分とナメた真似してくれるじゃねえの。

つまりヘルメスのファミリアの団員が渡したアイテムを使って少年をボコるって

こつた。ヘルメスになんらかの意図があるのはわかるが気にいらぬ。

「まあいい。現場を押さえてボコる」

【ロキ・ファミリア】が帰った後を狙うそう。そりやそうか、アイズに蹴散らされる。

まだ猶予はあるみたいだし、ゆっくりしてますかね。

「おっと、こうしちやいらねえ。邪魔者を片付けに行かないと！」

ヘルメスが何を考えているのか、とか少年は大丈夫だろうか、とかいう心配は先送りにして、目先の楽しみを追い求める事にしよう。

目標補足。おっと、小人族バルツムの少女まで。なんとというハーレム状態。だが誤差！ 誤差であるぞ少年！ 例えそこに10人いようと全員連れ去ってみせる！



「綺麗……」

「私のお気に入り、場所」

「凄いですねっ！ アイズさん」

高台の頂上から見える絶景を楽しんでいた4人。アイズに一途なベルと天然なアイズ。そしてアイズに対抗心を燃やすベルに想いを寄せるヘステイアとリリ。その光景

を隠れて見ているハルは、疾くベルとアイズを2人きりにするべく行動を開始した。

「綺麗だねベル君！ 2人つきりで見たらもつと綺麗に見えたな！ 2人つきりでね！」

2人つきりを強調してベルに抱きつき、アイズを威嚇する。

「か、神様……胸が！」

顔を真っ赤にしたベルを見てしたり顔を暫定恋敵の2人に向けるヘスティアだが、がちりホールドしてたはずのベルの腕からいつのまにか離れ、あまつさえ身体が宙に浮いていた。

「へ？」

「な、何事ですか!？」

それはリリも同じ状況だった。ヘスティアに対抗してベルのもう片方の腕に抱きつきこうとした瞬間、身体が宙に浮いていた。

「ハルさん、何を……？」

唯一、ハルが起こした行動をギリギリ補足出来たアイズがハルに質問を投げかける。

につこり笑ってアイズの質問には答えなかつたハルは、宙に浮いた2人をがちり抱える。

「はっはあー！ お邪魔虫2人確保だぜえええええええええええ!!」

「謀ったな最強君めええええええええ!?!」

「え、え? 何事ですかああああああ?!」

愉快的叫び声をあげていなくなっていた3人にしばらくポカンとした表情をしていたベルとアイズだったが、沈黙を破ったのはベルの方だった。

「あの、ハルさんっていつもあんな感じの方なんですか……?」

「うん。私が小さい頃からずっと、変わってない」

「それにしても凄い速度で走って行きましたけど、もう見えなくなってますね」

「ハルさんは私よりも強い、よ?」

「へ? ええええええええ!?!」

明かされた衝撃の真実。Lv. 6の『劍姫』であるアイズ・ヴァレンシユタインをもつてして自分より強いと言わせるハルとは一体何者なのか。アイズと2人きりである状況もすっかり忘れているベルはその事に対する興味が先行した。

「ハルさんって、そんなに強いんですか……?」

目の前の憧憬よりも強い存在。これまで何回か会って得た印象ではハルの事はよくわからないが凄い人っぽい、だった。

「私はずっと目標にしている人。Lv. 9で二つ名が『最強』^{ザ・ワシ}って。二つ名はハルさんが恥ずかしがつて、教えてくれなかったから、リヴェリアが」

「L v. 9……へ? L v. 9うううううう!」

「うん。私の……目標」

ここにハルがいたら「普通の人が生きてる年数で俺のレベル超えられたら立つ瀬が無
いんだが」と苦笑する所だが、ハルの生きてる年数を知らないベルと天然なアイズしか
ここにはいない。

「僕も頑張らなきゃ……」

憧憬が目指してる存在と聞いて、自分の恋を応援してくれたあの人がとても大きな存
在に見えたが、ちらりとアイズの方を見ると目に見えてオロオロしてたのでそんな考え
も吹っ飛ぶベルであった。

「どどど、どうしたんですかつ、アイズさん!」

「レベル……秘密……お説教……」

慌てふためくアイズをどうにか落ち着かせて話を聞いたところによると、ハルは目立
ちたがり屋ではないから世間にはレベルを秘密にしてて、都市最強と言われてる武人の
上はいいないという風になってるとの事。

「あ……謝りに行きましょう、アイズさんっ! きつと許してくれると思います。僕も
秘密にするので!」

「うん、そうだね。ありがとう、ベル」

「はいっ!」

「……で、俺の所に来たと」

「……ごめんなさい」

「アイズさんは悪くないんですっ?! 僕が無理にハルさんの事を聞いてしまったというか!」

「別に少年に言うくらいなら構わないし、アイズがうっかり人に言った程度で怒る程狭量じゃないって言うかなあ……いや、俺は怒ってる」

びくつ、とアイズの身体が震えた。

「何の為に俺がああ2人を連れ去ったと思ってる! そんなどうでもいい事に時間使うくらいならもう一回どっか2人で行って来いやア!」

ポイツとテントから放り出されたベルとアイズはまたしばらく捲し立てられた事を飲み込む為にぼうつとしていたが。

「じゃあ……どこ行こっか」

「え、えつと……何処でもアイズさんの好きな所でっ!」

取り敢えず、森を歩こうという事になった。

(ハルさんの後ろで何かごとごと動いてたけど……)

「ベル？」

「へっ？ あつ、今行きます！」

それについては考えてはいけなような気がして、動いていたものを頭の中から削除し、アイズについていった。

十二話

「ふははははは……あーっはっはっはっは！」

この時を待っていた。

そう、それは女性陣が泉に水浴びに行くこの瞬間、チラリとヘルメスと目でやり取りをして、兎が逃げようとしていたので捕まえる。

「おや少年、何で逃げようとしているのかな？」

「何か嫌な予感がしたので……え、ええっ？ どこ行くんですか？」

「ちよつくら覗きをしに、な」

目を輝かせるヘルメスと嫌がるベルを引き連れて、女性陣が水浴びしてる所へと歩いて行つた。

そも、覗きとは犯罪である。

女性の裸を無遠慮に覗くというのは言うまでもなく最低の行為である事は明白。

しかし、女冒険者の鍛え上げられ引き締まった身体を見たいという男は多いだろう。

一級や二級ともなればよほど気を抜いていない限り邪な奴が近づいて来たら気付くだろうが。

「まあ、つまり楽しもうぜ少年よ」

作戦はこうだ。

俺は別方向に、少年とヘルメスは一塊りになって木の上へ、気付かれそうになったら俺が陽動するというもの。

「さあ、ご禁制の場所を見る決心はついたかな？」

「ついてませんけどおおおおおおお!!」

無視。

気付かれる事なく配置についた。

第一級冒険者の裸を見せまいと目を光らせている【ロキ・ファミリア】の女性団員達を掻い潜れたのは、ヘルメスとベルを抱えた上で、音一つ立てずに木の上まで移動したハルの活躍によるところが大きい。

「お、おおおお………！　「これが花園………！」

木の上から遠慮なく覗きを敢行するヘルメスに対し、ちらりと入ったヘステイアやり、【ロキ・ファリミア】の面々の裸に一気に頬が紅潮する。

「や、やっぱりやめましようよ、こんな事!？」

罪悪感に駆られたベルが戻ろうとヘルメスの手を掴む。

「ここまで来て戻るっていうのは無しだぜベル君」

しかし男ヘルメス。意地を見せて抵抗する。

木の上で男二人がじたばたと暴れれば何が起こるか。

「へっ?」

ベルが足を滑らせた。

裸を見た事で気が動転して、ここが木の上である事をすっかり忘れていたのだ。

ドボン、と。

泉に落ちたらもう遅い。

「あれー? アルゴノウト君も水浴びに来たの?」

「へえ、可愛い顔してやるじゃない」

「ベル様っ!？」

「ベル君!!? 一体君は何を……!」

「まさか……ヘルメス様」

落ちて来た木の上を睨むと、「やべっ」という小さな声と共に隠れるが、第二級冒険者の目は誤魔化せない。

「あわ、あわわわわ……」

パニックになったベルが振り向いた先には。

「あ……」

恥ずかしそうに身体を隠すアイズがいた。

そして一瞬で紅潮が限界突破したベルはおもむろに立ち上がり。

「ご、ごめんなさああああああい!？」

L.V. 2とは思えない瞬発力で、脱兎の如く逃げ出した。

「あつ、逃げた!」

「とりあえずヘルメス様の捕縛優先!」

ばたばたしている泉を眺めて楽しんでいたハルは一人、小さな笑い声を漏らしながら消えた。

「あー面白かった」

長生きしてるとこういう娯楽が楽しくて仕方がない。

ひとしきり笑った後でのんびりと戻ると、そこには仁王立ちして魔力を迸らせているリヴェエリアが。

「ハル、正直に言ってくれ」

「はい」

「覗きに加担したか」

「ああもちろん、こんな面白い事を逃す手はないからな！」

「そうか。ならば死ね！」

「はっはっは。三十六計逃げるに如かず、つてね！」

ポロポロになって吊るされているヘルメスが目に入ったが、それはヘルメスの自業自得である。

「避けるな！ 当たれ！」

「嫌だよ痛いじゃん」

次々と放たれる魔法は、しかし周囲に被害を及ぼすものではなく、リヴェエリアもそこまで怒っていない事がわかる。本気で怒っていたら、「レア・ラーヴィティン」くらいは放ちかねない。

その魔法攻撃は、リヴェエリアが精神疲弊する寸前まで行われた。

「うちのリヴェリアがごめんね、今回の遠征でかなりストレスが溜まっていたようで、発散させてた」

「いや、大方の原因はお前じやろうが」

「犯人は主にヘルメス、という事になってはいるけど、今回はよくないな」

「わあーつてるつて。反省してる。やらないとは言つてないけど」

「どうせ何を言つても止められないし、極力問題を起こさないように注意してくれると助かるかな」

寝ているリヴェリアの頭を撫でながら、フィン達とそんな話をする。

「今回は戦闘も激しかったし予想外の事も多々起きた。思いつきり魔法を放てる時に放つておいた方がいい。「ロキ・ファミリア」が帰るのももうすぐだし、あとは俺がなんとかするとしよう」

「ヘルメスカ」

「ヤツがダンジョンに来た事自体がきな臭いからのう」

「ああ、少年に良からぬ事を考えているらしいから灸を据えようかなと」

段取りでは明日のはずだ。

あのヘルメスが「ロキ・ファミリア」の本隊がいる時に狙わせるとは考えにくい。

姿が見えないくらいではフィン達の目は誤魔化せないし、アイズを始めティオネやティオナも気に入っているから黙ってはいないだろう。

「シー、さすがに帰る日を遅らせるわけにはいかない。ロキに直接伝えたい事もあるし」「いや、そこまで望んじやいない。予定通りで大丈夫」

結局、俺がヘルメスの事を氣にくわないという自分勝手な行動に【ロキ・ファミリア】を付き合わせるわけにはいかないし。

そして、夜は明け、【ロキ・ファミリア】はホームに向けて出発していった。

十三話

その日の朝、ロキ・ファミリアを見送った俺に大胆にもヘルメスは話しかけてきた。

「俺が何をしようとしているのかは、気づいていそうな顔だね」

「まさか、どんな手を使って俺を止めるのかと思つていたが、態々出張つて来るとは」

「どんな策を用意しても力技で抜けられたら意味がない。だから俺が止めに来た。ベル君は人の悪意に慣れていない」

「だからあんなことをして少年を傷つけると。何故お前にお膳立てされなきやいけない。少年は、お前如きにちよつかいをかけられなくても強くなるやつだ」

「世界は英雄を欲してる。俺はベル君を英雄に仕立て上げるのさ」

「——ツ!! 神おまえが人間俺らの可能性を限定するような事してるんじゃないやねえぞ!!」

可能性を与える神が、選択肢を与える筈の神が、どうしてそんなふざけた事をしてくれる。

英雄を作る? ふざけるな、少年が例え英雄になりたいと思つていても、それは断じて神のお膳立てでなるものじゃない。

「ところで、姿を隠したくらいで俺に気づかれないと本当に思つてる?」

「アスファイ、逃げ——」

ドツ、と。

何やら薬品を持って近づいてきたアスファイと呼ばれた女の首根つこを掴んで地面に叩きつける。

「普段なら手を出したりはしないんだけど、今回は頭に來たんで、ちよいと手を出させてもらおう。安心しろ、殺しやしないさ」

挨拶の意味も込めて、蹴ってみると思いの外頭に來て力が入っていたのか、体から響く嫌な音と共に吹き飛ばされたアスファイは、木にぶつかってぐったりと倒れ伏した。

「……あれ、えーつと。手加減間違えたかな？」

「……………」

「よく外へ出てるとはいえ、俺の強さは知らないわけじゃないよな。放っておいたらちよいとまずい事になると思うけど。動いた方がいいんじゃないやねえの？」

ピシリと、何かひび割れる音がした。

「痛めつけたのは俺だけどき、ポーシヨンなりなんなり常備してたりしないのかね」

バキツと、何かが砕ける音がした。

「殺しはしないと云ったけどこれはなあ……」

パキンと、何かが致命的なラインを超えた音がした。

ソレはこの階層の天井から生まれてきた。

ああ、理由はよくわからないがこれは異常事態イレギュラーだろう。だってほら、ヘルメスだって呆然とした顔をしているじゃないか。

「じゃあない、これ使え」

ルーナ印のポーシオンをヘルメスに投げ渡す。ヘルメスよりもアレの対処が先だ。その為にはアスファイにも働いてもらわなければならないだろう。

基本的に俺は後方支援だ。

「しつかり働かせろ。それで不問にしてやる」

「損な役回りをさせちゃってごめんね？ アスファイ」

「主神を守るのには仕方のない事ですが……もう二度と敵対したくないですね。戯れだったからいいものを、本気だったら私死んでましたよ」

「というわけで彼にも言われた事だし、俺を助けると思っただけで働いてくれ」

「はあ……わかりました。行ってきます」

「よろしく、アスファイ」

『始末しろ、始末しろ』

怪物は誰かの声を聞いた。

『憎い憎い憎イ……！ 神を、忌まわしき神に凄惨たる死を』

怪物はソレを母の声だと認識した。

『殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ。異物を排除し

ろ。我が体内に入り込んだ異物^神を！』

怪物は憎悪の念によって育つ。急速に、急速に。

体内で感知した神の気配。憎き神の気配を敏感に感じ取った、『母』は我が子を解き放つ。

それは17階層主『ゴライアス』。怨念が、恨みが、執念が、ゴライアスを別の怪物へと作り変える。

『殺せ』

怪物は18階層へと生まれ落ちた。

「く、黒いゴライアス!？」

「なんでここに階層主が出るんだよお!？」

「逃げるしか無いって!!」

前例のない事態に冒険者の思考が止まる。

「ボールス!」

「アンドロメダかア!? ありやどうなってやがる!？」

「わかりません。ヘルメス様も聞いたことがない事態だと。逃げるにも逃げられませんし」

「逃げられない? そりやどういう事だ!」

「そのままの意味です、17階層への道が落石によつて閉ざされました。幸い、下への道は繋がっているようですが?」

「ハッ、そりや死ねってか! ならあの怪物を倒さにやいけねえって事だよなア! 聞いたな野郎共! あの怪物を倒す! 逃げた奴ア二度とこの街に踏み入らせねえぞ!」
『オオオオオオオオオオオオ!!』

虚勢でも何でもいい。大声を出して心を奮い立たせなければ、修復不可能なくらいにボロボロにされそうなのを冒険者達は必死に押し殺した。

(何かを探してる……?)

何処かでの戦いを見ているヘルメスと同じようにハルもまた後方から戦いを眺めていた。

何一つ動かないわけではなく、俯瞰しながらピンチの冒険者達を陰ながら救いつつ黒いゴライアスの動きを眺めていた。

「ここは少年に譲りたい訳だが」

そう一人呟く。

事実、ベースがゴライアス故、いくら強化されたとしてもそのポテンシャルは知れたものだ。ベルに顔を飛ばされても再生する、その再生能力は驚異だが、言い換えればLv. 2であるベルの攻撃も通るといふ事。

「それにしても魔法の威力が高かったのは置いといて」

リユー、アスファイが必死に食い止めているお陰で大した被害は出ていないものの、黒いゴライアスに引き寄せられるように集まってくるモンスターが少なくない被害を出している。前も後ろも警戒しなければいけない、さらに前には特大の脅威。それが冒険者達を疲れさせる。

「よつと」

「す、すまねえ！」

「もつと固まって動け。そうじゃないと死ぬぞ」

また一人、ピンチになっていた冒険者を救いながら、それでも積極的に前に出ないでいると。

「なるほど、なっ！」

今度は、狙われた神を救う為に駆け出した。

見つけた。

母が憎悪を向ける敵。白い服に黒くて長い髪。

あれだ。あれだ。あれだ！

『オオオオオオオオオオオオ!!』

「なっ！」

纏わりつく敵を跳ね除け走る。痛い引き離しささえすれば問題ではない。

「……神へスティア！」

「うええっ、嘘だろ!?! 何でボクが！」

遅い。

あと一歩で踏み潰せる。

母の怨敵をこの手で――。

『オオオオオオオオオオオオ!!』

単純な振り下ろし。

破壊力は抜群。抗う力を持たない神など簡単に潰れる事間違いないし。

なのに。

バチンツ、と。呆気なく、簡単に。何者かに弾き飛ばされた。

「神様ああああ!!」

凄まじい速さで駆けてきた白い髪の冒険者に攫われて、また距離が離される。

ああ、誰だ。邪魔をした奴は。

「流石に神を狙ってるなあっちゃあ、出ないわけにはいかないよな」

『オオオオオオオオオオオオ!!』

「温い。温すぎるぞお前！」

目の前の敵を排除しない事には母の命令を達せられないと察した黒いゴライアスは、最大の敵と認識して、攻撃を開始した。

十四話

ゴライアスが振り下ろして来た腕を弾く。咆哮ハウルを冒険者達に当たらないように弾く。あくまでタンクに徹するつもりなので実質やる事はそれだけだ。なんて容易い。

「リ्यूー！ 攻撃は任せたー！」

無言で動いてくれるのがとても気持ちいい。こう、少しの言葉だけで十全に把握して動いてくれるってのは以心伝心というかなんというか。冒険者の経験とかじゃないよ本当だよ。

(さて、良いところを少年に譲る為にはどうすればいいかな、つと)

俺のレベルが知られてしまったのはマズかったと今更ながらに反省する。苦戦してる風を装ってトドメを譲るなんて事が出来たかもしれないのに。いや、過ぎたことをとやかく言うまい。

取り敢えず帰ったら一回アイズに稽古をつけてやろうと心に決めておく。

(ん……？ ヘルメスがこんな所で何を……)

ああ、なるほど。

少年を英雄にさせたがっていたヘルメスがここで動かないわけがない、か。

どうベルを言いくるめて、どう決めてくれるのかを楽しみに、もうちよつとタンクを続けますか！

「少年が来るまで、遊ぼうぜ？」

「私は結構いっぱいいっぱいなのですが……」

「実は俺もいっぱいいっぱい」

「貴方がふざけた性格だと言う事は今とても理解しました」

「くつ、こうしてる今もゴライアスの攻撃を弾き続けてる俺に向かって何たる辛辣な言葉！でも俺、エルフに冷たくされるのは慣れてるんだ！」

「攻撃に行つて来ますね」

「無反応つて結構辛いんだよ？ 戦場に癒しは重要だと思うんだよね。モチベーションにも繋がるし……ねえ聞いて!」

仲良くなつたと思えばいいか。

「怪我はありませんか、神様!?!」

「あ、ああ。ボクは大丈夫。それよりもアレは何で一直線にボクを……?」

「君が、神たる力を解放したからだろうね」

まるでタイミングを見計らっていたかのように、ヘルメスが姿を現した。

「ヘルメス様……?」

「やあ、ベル君。君にも話があるんだけど、先にヘステイアに状況説明する方が先かな」
「解放した、つて言ってもちよつとだけなんだけど!?! まさかそんなちつぽけな力の解放で……?」

「そう、そのまさか。俺も予想外だった。ダンジョンがこんなにも神を憎んでいたとは。その点で言えばヘステイアは軽率だったと言わざるを得ないな」

「でも、あの時はベル君が——」

「ああ、あの場面での理想的な行動はベル君がどんな目にあつていようと、指を啜えて見ている事だ」

「——ツ! そんな事」

「出来るわけない。知ってるよ。ヘステイアがそんな性格なのは。俺も少しなら大丈夫だと思っていたが、現実是这样だ。俺らの幸運は、ハルという規格外の存在がいた事だけど……」

責任を感じて、ツインテールがしなしなししているヘステイアから視線を外し、ベルに向き直る。

「そこで、話はベル君に変わるわけだ」

「僕に……ですか？」

きよとん、としているベルの為に説明を続ける。

「規格外のハルだけど今回は防御しかない。あれを見て」

「……すごい」

その光景は、まさしく圧巻だった。盾も持たず、ゴライアスの攻撃を受け流し、弾き飛ばす。苦しんでいる様子もなく、むしろ楽しんでる様にすら見える。リユーが攻撃する事で咆哮ハッルが別方向に向くのを防いでいる。

——ハル、リユー共に被弾していない。

自身が目指す、情景が目指しているものの片鱗を、ベルは見た気がした。

「時間は彼が稼いでくれる。だからベル君、トドメは君に任せる、と彼は言っていたよ」
「え、ええええええええ!! 僕がですか!?!」

「ああ、可能だろうか? 先程ゴライアスの顔を吹き飛ばしたあの魔法に使用したスキルがあれば」

「……………」

「さあ、ベル君。トドメは君だ。——情景を燃やせ。己が理想を成し遂げて見せろ」

大剣が降ってきた。

グリップを握ると、とても手に馴染んだ。見ればハルが遠くでサムズアップしている

のがわかった。

目を閉じ、思考の裡に意識を向け。そして――。

リンゴーン、という鐘の音が聞こえてきた。

「時間を稼いでください！　お願いします！」

同時に、少年のそんな声も聞こえてきた。

（チャージスキル。詠唱を必要としない魔法があれば強くなるのだから、その性能は計り知れない。本格的にチャージしようとするとなら無防備になるがこの大人数だ、少年の事を守るのは容易いだろう）

L v. 2でこんな怪物を打倒する手段を持っていることに嫉妬を隠せないよ、俺は。

「ゴライアスは俺一人で引き受ける！　リユースは少年のカバーに！　森のモンスター達が少年に向かって移動して！」

「わかりました」

俺がL v. 2になったのは、冒険者になつて果たしてどれくらい時間が過ぎていたかな。5年か、10年か。多分、そこら辺。

弱くて、才能が無かつた俺は、ロクにパーティーにも入れてもらえずソロでダンジョンに潜り続けて、それだけの年数が経つてようやく器の昇華を体験できた。

「羨ましいよな、ガムシヤラに頑張つてたら、どんどん強くなる事を実感出来るんだぜ？」

強化されて落ちてきたゴライアスに語りかける。返答が返つてこないのはわかりきっているからこれは、俺の独り言だ。

「ソロでしか潜れないから、浅い階層しか潜れない上に経験値だつて溜まらない。朝から晩まで潜つても大した収入にならず、ルーナの2人で食べる草はどれか話合つた事もたくさんある。ああ、羨ましい。俺にそんな力があればあの時——」

いや、そんな事は考えるべきじゃないな。ただ今は若い人達の為に、その芽を摘まない為に行動するべきだ。

「つまらない話をしてるうちに、チャージが終わつたようで」

「ハルさん、道を開けてくださあああああああああああああいい!!」

「はいよつと」

俺が道を開ければその直線上には少年とゴライアスしかいない。

「さあ、決めてくれ。少年」

「あああああああああああああああああああああああツツ!!」
決着。

幕間 無能の少年のお話

「ただいまー」

「大丈夫でしたか？ 眷属になってくれたにもかかわらずこんなに苦勞をかけてしまつて……」

「それはもう終わった事でしょ。俺は望んでルーナの眷属になった。それはルーナであろうとどうこう言われる謂れはないよ」

「ですが……」

「あーもー終わり！ そんな事より今日の稼ぎ！」

「ちやらん、と腰に下げてあつた袋から出てきたのはあまりにも少ない金額。

「今日も一層で頑張つたんだけど、やっぱりこのくらいしか集められなかつた」

「……………ツ！ 今日も食べられそうな野草とか探しに行きますか？」

「そう、だね。ルーナはここにいて。俺が探してくるから」

「はい、と葛藤はあつたが神に野草漁りなんてさせたくないというハルの意思を尊重して、待っている事にした。

「じゃあ、行ってくる」

オンボロのドアを開けて駆けていったハルを見送ってからふう、とため息を1つ。

「ハル君はあんなにも頑張っているのに……」

毎日朝から晩までずっとダンジョンに潜って稼げるのはその日の夕食にもならない程度のヴァリス。帰ってきた後は休む暇もなく、野草探しでオラリオ内外を走り回る。

あまりにも弱い。あまりにも才能がない。

1日頑張つて、それでもステイタスの上昇が1、もしくは0だった時には伝える時に涙を止めるので精一杯になる。

冒険者になつて半年

ハルがルーナの眷属になつてから、そのステイタスは殆ど変わっていないかった。

その弱さ故にパーティにも入れてもらえず、ソロでも安全な階層でただひたすら狩る事しか出来ない。

ハルの為に来る事が殆どない事が、ルーナにとっては齒がゆく、悔しかった。最低限の手助けとして数少ないポーションには月の加護を付与しているが、それは死なない為であつて強くなる為の手助けではない。

「何かないんでしょうか……」

考えても、考えても答えは浮かばず、時間だけが過ぎていく。

そうして、いつもならもう野草を採取し終えて戻つてくるはずのハルが戻つて来ない

事に気がついた。

「群生地を見つけたからはしゃいでるのであればいいんですけど」

冒険者が出来たのは最近だ。

神が降りてきてから急速に変わっていったこの辺りも、ようやく落ち着きつつある。それでも変わった環境に慣れたとまではいかない微妙な時期でもある。

「……早く、帰ってきてくださいね」

椅子に座って、ルーナはハルが帰ってくるのをひたすら待ち続けた。

「ただいま。遅くなってごめん」

椅子に座ったまま耐えきれず寝てしまったルーナは、そんな声と共に跳ね起きて。

「お帰りなさ……ッ、その、怪我は」

「これ？ いやー、中々食べられそうな野草が見つからなくてさ。走り回ってたら転んじゃって」

「嘘」

「……………」

「神に嘘は通じません。誰に、やられたんですか？」

「……さあ、後ろから一発殴られて、いいだけ殴られた。相手の顔がなんて見てないし、気を失ってて目が覚めたらせっかく集めた野草も服もボロボロ。ごめんね、服も野草も駄目にしちゃって。さーて、今日もダンジョンに潜って稼いでくるか！ 幸運な事に服の予備はまだあるからちよつと着替えてくる」

早口で捲し立て、ボロボロの身体で、今にも死んでしまいそうな雰囲気でもダンジョンに向かうと言うハルの腕を咄嗟に掴んだ。

「それで貴方が死んだら意味ないんですツ!! もつと、もつと……自分の身体を労ってください。お願いですから……お願い、ですから……」

叫んで、涙が溢れてくる。

この世界はハルという少年に対して理不尽すぎる。

食べ盛りの年頃なのに毎日毎日野草や少しばかりの食糧だけ。寝る場所は快適とは言えないし、周りの人のあたりはとても強い。

それはそうだ。バベルが建つてモンスターが無制限に外に這い出てくる事は無くなったが、つい最近まではそれが当たり前だったのだ。その時代において並ぶ者無しと称された男女の間に生まれた無能^{ハル}。

『お前がいなければあの二人は死ななかつた』

『弱い役立たずは野垂れ死ね』

罵声。暴力。嫌がらせ。

パーティに入れてもらえず、上層で頑張るハルを街の人は嘲笑う。

それでもハルは、歯を食いしばって頑張ってきた。それでも諦めずに、折れずに、今だって頑張ろうとしている。

「貴方が、ハル君が死んでしまったら。後にも先にもハル君しか入らないこのファミリアはどうなっちゃうんですか？ まだハル君は若いです、時間はたっぷりあるんです。お願いですから、そんな死に急ぐような真似はやめてください……ッ！」

「……ごめん、ルーナ。今日は休む事にする」

「ちゃんと身体を拭いて、あ、手当ては私がしましょうか？」

「大丈夫、一人で出来るよ」

奥の部屋から、時代に押し殺した泣き声が漏れてくる。

「何で、こんな頑張ってる子が、こんな仕打ちを受けなきゃいけないんですか……」
ボタン、とドアを開けて外に出る。

ハルには、聞かせたくなかった。

「ふぎけるなッ!! あの子が何をした! あんなに、あんなに頑張ってる子が! 何であんなに苦しんで、苦しんで、苦しんで! 躓いて躓いて躓いても、どうして! こんな悲しい生活を送らせなきゃいけないんですかッ!!」

何よりも、ハルがあんなに苦しんでいるのに、ただポーションに加護を付与する事しか出来ない自分が悔しかった。

ヘファイストスのように、鍛冶が出来れば、ハルのために武器を作れたのではないか。装備の点検が出来れば、ポーションが作れば、他にも、他にも。

「……はあ、こんな姿、ハル君には見せられませんね」

少なくともハルの前では、しっかりとした女神でいたかった。先程は少々取り乱してしまつたが。

「よし、切り替えましょう」

パチン、と両頬を叩いて気合を入れる。

他の誰が見捨てても、私だけは絶対に側にいると心に決めて。